特100
610

ア カ ギ 叢 書

群衆心理

ル ボ ン 氏

葛西又次郎 譯

始

特100
610

アカギ叢書第二十編

佛國
文學士
ルボン氏著
葛西又次郎譯

群衆心理（下）

大正
3. 6. 19
内交

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を經たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を經て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき內容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尨大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行するに至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。卽アカギ叢書は各册を全部金十錢にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に飜譯す。如何に尨大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。依つて以て從來專門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫の、高價、尨大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんとす。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月

赤城正藏白

群衆心理目次

第二卷　群衆の意見及び信條……一
第二章　群衆の意見の近因……一
第一節　假相、言辭、常套句……二
第二節　迷想……一〇
第三節　經驗……一三
第四節　推理……一五
第三章　群衆の指導者及び其の群衆説得方法……一九
第一節　群衆の指導者……一九
第二節　指導者の行動手段、斷言、反覆、傳染……二八

群衆心理

第二卷　群衆の意見及び信條

第二章　群衆の意見の近因

吾人は既に群衆の心理に特別なる受容性を與へ、或る感情思想を發達せしむる遠因を研究したるを以て、是より群衆に直接行動を起さしむる近因を考究したい。而して是等諸原因が、充分なる効果を生ずる爲めに、如何に運用せられねばならぬかは後章に於て論ずる積りである。

吾人は本書の初めに於て、集合體の感情、思想、及び推理方法を研究したが、是に由て群衆に印象を與ふべき方法を一般的に論ずることが出來る。吾人は又群衆の想像を刺戟するものは如何なるものなるかを知り、暗示殊に假相を被むりて現はれたる暗示の力と、傳染性とを熟知したり。併し暗示は種々なる源泉よ

第三節　勢威……三〇
第四章　群衆の信條及び意見の變化の範圍……
第一節　固定的信條……四八
第二節　群衆の變り易き意見……五六
第三卷　各種の群衆の分類と說明……六六
第一章　群衆の分類……六六
第一節　不等質的群衆……六八
第二節　等質的群衆……七一
第二章　所謂犯罪的群衆……七二
第三章　刑事陪審官……八〇
第四章　選擧者の群衆……九〇
第五章　議會……一〇二

り出づる故群衆の心意に作用を及ぼし得る諸要素の間に著しき相異がある。從て各要素を別々に研究する必要がある。是は決して無益なる研究ではない。群衆は稍昔話のスフインクスに似て居る。吾人は必ず群衆心理の問題を解決せねばならぬ、然らざれば吾人は群衆の爲めに呑滅さるゝ外はない。

第一節　假相、言辭、常套句

吾人は群衆の想像を研究したる時、群衆は殊に假相の印象を受け易きものなることを見た。是等の假相は何時でも手近にあるものではないが、言辭、常套句を適宜に用ゐて之を誘起することが出來る。是等のものは巧みに取扱ふ時は昔の魔術家の如き不思議の力を持つもので、群衆の心裡に暴風を捲き起すとも出來れば、又之を鎭靜することも出來る。單に言辭や常套句の魔力の犧牲となりたる者の骨ばかりで、昔埃及のキオプス王が築造したるピラミッドよりも尙ほ高いピラミッドを築造することが出來るだらう。

言辭の力は言辭が誘起する假相と相結合せるも、言辭の眞正の意味とは全く關係がない。時としては意味不明瞭の言辭が最も偉力を有することがある。假令ば民主々義、社會主義、平等、自由と言ふ樣な言辭は、其の意味極めて曖昧であつて、浩瀚なる書册を以てしても之を精確に說き盡すことが出來ない、併し是等の短句には眞に不思議なる魔力ありて、其中に凡ての問題の解決が含まれて居る樣に思はれるのである。要するに是等の言辭の中には、夥多の無意識的渴想と、之が實現の希望とが綜合含蓄されてあるのである。

道理と議論は言辭常套句と戰ふ力がない。言辭常套句は一度嚴かに發言せらるゝや、群衆の顏には忽ち尊敬の表情現はれ、頭は自ら垂れる。故に或人は之を以て自然力、超自然力と見做す。言辭常套句は群衆の心意に壯大なる漠然たる假相を現出する。此の茫漠が却て魔力を增す因となる。言はゞ之は祭壇の奥殿に祭られたる不可思議なる神靈にて、信者が膝行頓首して之に近づく如きものである。

言辭に依て誘起されたる假相は、其の言辭の意味とは關係がないから、時代や之を用ゐる人民に依り推移して行くが、常套句のみは終始依然として同一である。或る一時的の假相は或る言辭に附隨する。言辭は假相の電鈴を鳴す爲めの電氣釦である。

凡ての言辭常套句が皆假相を喚起する力を持つてる譯ではない、昔は其力を持つて居たが時經るに從て其力を失つたものもある。斯うなれば最早空しき響のみで、只人に思索の面倒を掛けない丈けの効用があるばかりである。併し幼時學び得た僅かばかりの常套句、陳言で以て吾人は殆ど省察の必要なく、生涯を送るに必要なる凡てのものを所有することが出來る。

或る特種の國語を研究して見ると、其の言辭の變化は極めて緩慢なるも、之に依て喚起さるゝ假相又は意味は絶えず變化する。余が他の一著述に於て、一の國語殊に死語の絶對的飜譯は全く不可能なりとの結論に達したのは此の理由に依るのである。吾人が佛蘭西語を以て羅典語、希臘語又はサンスクリット語

に代ふる時、又は二三百年前の佛蘭西語を解釋しようとする時は、吾人は只現代生活が吾人の理智に與へたる假相觀念を、古代生活が古代人種の心に發生せしめたる觀念假相に代ふるのみである。革命時代の人士が、希臘人羅馬人を摸倣しつゝありと思へる時、實は彼等は古人の知らざりし意味を古代語に加へて居つたに過ぎないのである。希臘人の諸制度と、今日同樣の語を以て稱呼されて居る制度との間に何の相似たる所があるか。當時の共和國は、其の根柢は、一群の奴隷を支配せる小專制君主の連合より成れる貴族制度で、是等の貴族政治は奴隷制度なければ一刻も存立するとの出來なかつたものである。

又自由なる語に就て見るに、昔思想の自由などゝ言ふとは夢にも思はれず、神を議し、法律を議し、市の習慣を議するを以て最大罪惡と爲したる時の自由と、今日の自由との間に何の相似たる所があるか。又祖國なる語は、雅典人又はスパルタ人に取て雅典スパルタの崇拜以外何の意味ありたるか。相對立して戰を常事と爲したる諸市より成れる希臘には、希臘の崇拜はなかつたのである。

相異なれる宗教言語を有し各種族、人種に分裂したる古代のゴール人に取ては、祖國なる語は如何なる意味を有したるか、シーザーは常に彼等の間に同盟者を發見し得たるが爲めにゴールを征服し得たりと言ふにあらざるか。ゴールに政治的及び宗教的統一を與へて之を一國と爲したのは羅馬である。此の如く遠き古に溯るに及ばず、僅か二百年許以前に大コンデの如き諸侯が、外國人と聯盟して其の主君と戰ひたる時彼等は吾人と同じ祖國なる觀念を懷いて居たらうか。又外國に亡命し佛國と戰ふを以て名譽の法典に從ふものと爲せる王黨員等は、祖國なる語に就て今日の吾人と同じ考を有して居たであらうか。

此の如く意味が全く變更した言辭は無數にある、吾人は苦心努力の結果、其の言辭が以前用ゐられたる所の意義を發見して始めて之を解し得る言辭は無數にある。單に吾人の祖先が國王とか王室とか言ふ言辭を如何なる意味に取つて居たかを知るにも大なる研究を要すると言ふのは尤もな話である。然らば之よりも複雑なる言辭は如何であるか。

由是觀之言辭は時代に依り、用ゆる人民に依て變化する動的推移的意義を有するに過ぎない。そこで言辭を以て群衆を動かさんとせば、先づ知らねばならぬ事は、群衆が或る一瞬時に之に與へて居る意味であつて、昔の意味や後來或る個人が與ふる意味ではない。

故に政治的動亂又は信條の變遷の爲め、群衆が或る言辭に依て喚起されたる假相に對して深き反感を懷くに至つた時は、眞正なる經世家の第一義務は、其の言辭の表示する事物自體に手を下すとなく言辭を變化するのである。事物の實體は、傳承的社會組織と密に相抱合せるを以て、容易に變更するとの出來ないものである。遠慮あるトクヴィルは既に、總督政治及び帝政の事業は殊に新たなる言辭の衣服を以て、過去の諸制度の大部分を覆ふにありたるを說いて居る、換言すれば、群衆の想像に不愉快なる假相を惹起させる樣な言辭を除去し、之に代ふるに新奇なるが爲めに、斯かる假相を喚起する虞なき言辭を用ふるのである。此の如くして taille なる語は地租、gabelle は鹽稅、aids は商事會

社、組合、免許等に對する稅の意味となつたのである。

然らば政治家の職掌の第一要義は、人氣ある或は兎に角惡感を挑發せざる言辭を以て、群衆が舊來の名稱にては最早忍ぶと能はざる事物に新たに命名するにある。言辭の勢力は極めて偉大なれば、選擇宜きを得たる語句を以てすれば、群衆の最も嫌忌せるものを最も氣に入るものと爲すとも出來るのである。テーヌの言にジヤコビン黨がダホメー殖民地に相當する如き專制政治を行ひ、宗教裁判に等しき法廷を開き、古代墨西哥に行はれたる如き大虐殺を行ひたるは、當時の人氣に投じたる自由平等なる言辭を擔ぎ廻りたる爲なりと言つてあるのは尤もなことである。治者の技術は辯護士の技術と同じく、殊に言辭を巧みに使用するにある。只此の技術の最大困難の一は、同一の社會に於ても、同一の言辭が社會階級の異なるに從て異りたる意味に使用せらるゝ點である、是等社會階級の人々は外觀は同じ言辭を用ゐて居ても意義から言へば決して同一の國語を話して居ないのである。

前述の諸實例に於ては、言辭の意義を變化せしむる重なる要素は時である、併し若し人種が一要素として影響を及ぼす場合を見れば、同一時代に於て文明の程度相等しきも人種を異にするものゝ間にありては、同一の言辭が極端に相異なる觀念を現はすに用ゐらるゝことを發見するのである。是等の差異は多く旅行して觀察せざれば解し難き故、余は此の主張を固持するを暫く差控へ、只相異れる人民間にありて、最も異れる意義を有する言辭は、正に群衆に依て最も多く用ゐらるゝ言辭であることを言つて置きたい。今日屢用ゐらるゝ民主々義とか社會主義とか言ふ言辭は正に此例である。

此等の言辭は實際羅典人とアングロサクソン人の心には、正反對の觀念假相を表示するのである。羅典民族に於ては民主々義と言ふ語は、殊に個人が其の意思及び獨創力を、國家に依て代表せられたる社會の意志及び獨創力に從屬せしむることを意味す。國家は益多く百般政務の指導、中央集權、獨占、一切事物の製造等の任務を負はさるゝのである。急進黨も社會黨も將た王權黨も常に依

賴する所は國家である。之に反しアングロ、サクソン人種殊に米國に於ては同一言辭たる民主々義は、個人の意志の著しき發達と、國家が全く從屬の地に立つことを示す、即ち國家は警察、軍隊及び外交關係を除く外は教育の指導さへ許されぬのである。同一の言辭が兩人種に取ては全然相異なれる意味を持て居る譯である。

第二節　迷　想

文明の曙光の照し始めて以來、群衆は常に迷想の影響を受けて居る。群衆が殿堂彫像、祭壇を設けて崇拜してるのは何よりも此の迷想の創造者の爲めである。其が過去の宗教的迷想たると、現代の哲學的社會的迷想たるとを問はず、是等の恐るべき主權を有せる迷想は、順次地球上に榮へたる各文明の先驅を爲して居る。カルデヤや埃及の殿堂及び中世の宗教的建物が建設せられたるも、百年前歐洲を震憾したる大動亂の起りたるも皆迷想の名に依て行はれたのである。

吾等の政治的、美術的或は社會的觀念にして有力なる迷想の感化力を受けないもは一もない。時として人々は大動亂大紛擾の犧牲を拂つて迷想を顚覆することがあるが、又直ちに之を再建するは到底免れ難き運命らしい。迷想なければ人は原始的野蠻狀態より決して蟬脫し得ざりしなるべく、迷想なければ復た直ちに舊の狀態に歸るであらう。迷想の果敢なき陰影たるは疑なきも、吾人の夢より生れ出でたる此の迷想は、諸國民をして壯大なる藝術、偉大なる文明を創造せしめたのである。

「若し吾人にして博物館又は圖書館に於て宗教の鼓吹に依て成りたる著述や美術の紀念碑を悉く破壞せんか、人類の大なる夢の中殘す所何物があるか。人々に之なければ生るゝ能はざる希望迷想を與ふるとは神、英雄、詩人存在の理由である。科學は五十年間此の事業を企劃する如く思はれたが理想を渴望する人々の心中に於て遂に交讓和解された、是れ科學は虛言を吐くとが出來ないから、敢て過大の約束を與へて人に滿足を與へるとが出來ないからである」とダニエル、

レシューは言つて居る。

前世紀の哲學者等は、吾人の祖先が幾百年間語り傳へて生存の根據と爲した る宗教的、政治的及び社會的迷想の破壞に熱中して、遂に希望と忍從との源泉を枯渴せしめ、幻影を除き去りて、其の裏面に弱き者に對して何等憐憫の情なき盲目にして沈默なる自然力の控へ居るを見たり。

哲學は多大の進歩を爲したるに拘らず末だ民衆を魅する底の理想を提示することが出來なかつた、然るに丁度混虫が光明を求むる如く、民衆は本能的に彼等の欲する所を彼等に與ふる修辭家に向ふ。國民進化の要素となつたものは常に眞理でなく誤謬であつた。社會主義が今日此の如く有力なる理由は今尙生氣ある最後の迷想を構成するからである、而して學術が色々其の誤謬を論證しても勢力は引續き增進して居る、其の主要なる力は社會主義を唱道する人士が事物の眞相に通ぜず大膽に向ふ見ずに人類の幸福を約束する點にあるのである。社會的迷想は今日堆積したる過去の廢墟に據て支配して居るが、將來も亦之に附

屬して居る。民衆は決して眞理を渴望したことはない。彼等は若し其の趣味に合はなければ正しき證據を捨て、誤謬が彼等の心を誘ふ所あれば寧ろ誤謬を取るのである。民衆に迷想を與ふるものは何人と雖ども其の支配者となり得べく、其の迷想を破壞せんとするものは必ず彼等の犧牲となるを免れない。

第三節　經驗

民衆の心に固く眞理を樹立し、餘り危險になりたる迷想を破壞する唯一の有効なる過程は經驗である。併し此の目的の爲めには經驗は極めて大仕掛に行はれ度々反覆さるゝ必要がある。一時代の經驗は其次の時代に取て役に立たないのが一般である、論證の例に引用される歷史上の事實が何の役にも立たないのは之が爲めである。是等歷史的事實の唯一の効用は、苟くも何等かの影響を與へ、又は誤りたる意見が民心に深く根を下せる時、首尾能く之を根絶するには、經驗は一代又一代と如何程反覆するの必要あるかを示す點である。

現世紀及び前世紀は比類なき不思議なる經驗の時代として長く後世史家に依て引用せらるゝことであらう。

此等の經驗中最も偉大なるものは佛蘭西革命であつた。社會が純正なる道理の指導に依て最上層より最下層迄改造し得るものでないことを發見するに數百萬の人命を犧牲とし、全歐洲を二十年間根柢より動亂せしむる必要があつたのである。獨裁官等は彼等を歡迎する國民に重き犧牲を拂はしむるものなることを實驗的に證明するには、五十年間に二回の悲慘なる經驗を嘗むるを要した、而して其の結果の極めて明白なるに拘らず人々は未だ充分に此間の消息を覺らないらしい。併し第一回の經驗は三百萬生靈の犧牲と外敵の侵入を招ぎ、第二回は領土を失ひ其の結果常備軍設置の必要を惹起した。第三回は僅か以前に計畫未遂に終つたが何時か必ず企圖せらるゝであらう。巨大なる獨逸軍隊は、三十年前に專ら傳へられたる如く、一種の無害なる國民的守備兵にあらざることを佛國民全體に認めしむるには、佛國民に於て實に高價なる恐ろしき戰爭を惹起

す必要があつたのである。又保護貿易主義は之を採用する國民を零落せしむるものたることを認めしむるには、少くも二十年間の不幸なる經驗を積む必要があらう、此の如き例を擧げれば實に數限りもないのである。

第四節　推理

群衆に印象を及ぼし得べき要素を枚擧するに、其の影響の消極的價値を指摘する必要がなければ道理は全く省いても不便を感じない。

群衆は推理に依て動かさるべきものでなく只粗雜なる聯想を諒解し得るに過ぎない事は先に示した。故に群衆を動かすことを知て居る辯士は何時でも彼等の感情に訴へ決して其の理性に訴ふることを爲さない。論理の法則は群衆に何等の作用を及ぼさないのである。群衆に强き信念を與ふるには先づ第一に群衆を動かすべき感情を了解し、自分も此の感情を有すと見せ掛け、次で初步なる聯想に依て或る暗示力に富める概念を齎して此等の感情に變更を加へ、必要な

らば當初の觀察點に立歸ることが出來、殊に自己の言論が群衆の間に發生せしめつゝある感情を刻々窺ひ知ることが必要である。此の如く自己の演說の爲めに刻々生じ來る結果に從て絕へず適宜に言語を變更するの必要があるから、準備し研究し來りたる言論は始めより其の効力を失ふものである。斯かる演說に於ては辯士は自己の思想の進路を追ふて進むばかりで、聽衆の思想には一向顧慮せざるを以て此の一事で以て、辯士の勢力は全滅して仕舞ふものである。

論理的の人は稍緻密なる推理の連鎖に依て說服せらるゝに慣れて居るので、群衆に話す時も此の勸誘法に出づるを免れず、自ら其の辯論の効果乏しきに驚くのである。論理學者曰く三段論法換言すれば類同物の聯結を基礎とせる普通の數學的結果は命令的なり、此の命令は非有機的團聚と雖ども若しそれが類同物の聯結を追求することが出來れば之に服從せしむるものであると。斯は疑もなく眞實であるが、群衆は此の如き聯結を追求すること能はず又之を諒解すること能はざるは非有機的團聚と差異がない。若し推理に依て原始的人士——例

令ば野蠻人又は兒童——を說服せんとせば此の論法の價値少なきを諒解することが出來よう。

感情と戰ふ時、推理の全く無力なることを見るには原始的生物に下る必要がない。幾百年間宗教的迷信が如何に執拗に最も單純なる論理と衝突せるかを見れば充分である。殆ど二千年の間最も優れたる天才も迷信の前には叩頭したのである。其の眞實を疑て之を非難するには近世を持たなければならなかつたのである。中世紀と文藝復興期は幾多の人材を輩出せしめたが、理性に依て自己の迷信の兒戲に類せる方面を諒知したるものは一人もなく、又惡魔の非行に關して若くば巫術者を焚殺するの必要に關して一言半句の疑すら公言するものは一人もなかつたのである。

群衆が決して理性の指導を受けぬことば歎ずべきことであるか、吾人は敢て然りとは言はない。人間の理性は、迷想の如く熱心と剛毅とを以て、人類を刺戟して文明の途に進ましむるに益のなかつた事は疑がない。吾人を指導する其

意識的諸勢力が生みたる迷想は疑もなく必要であつた。各人種は皆其の心的組織の中に其の人民の運命を支配する法則を含有して居る。而して其の人類が强烈なる衝動を以て其の指導に從ふのは多分是等の法則である。其の有樣は丁度諸の國民が、槲の實を槲樹とし、彗星をして其の軌道を走らしむる造化の力に似たる秘密の力に依て動かされて居る觀がある。

此力を少々にても知らんとせば、吾人は之を民族進化の一般の進路に於て求め、時として此の進化の源と見ゆる個々の事實に求めてはならぬ。若し是等個々の事實のみ考慮するものとせば、歴史はありそうにもなき連續せる偶然の機會の結果と思はるゝであらう。ガリレア湖畔の一大工が二千年間全智全能の神となり、其名に於て最も重要なる文明が建設さるゝとはありそうにもなき事である。又阿拉比亞人の數隊が沙漠の中より出で、古の希臘羅馬世界より廣大なる地を征服し、アレキサンダー大帝の帝國よりも更に偉大なる帝國を建設するとはありそうにもなき事である。又歐洲發達の全盛期に於て、之を治むる權力が

組織的體統を建てたる時に際し、名もなき一砲兵中尉ナポレオンが草間より崛起して多數の國民及び諸君主を支配すべしとはありそうにもなき事である。

然らば吾人は道理を哲學者に一任し、そが人々の支配に力ありとは余り强く主張しまい。凡ての文明の源泉たる感情即ち名譽、獻身、信仰、愛國心及び光榮を愛する心等の如き感情が創造されたるは道理に因るのではなく却て道理に反して生じたものである。

第三章　群衆の指導者及び其の群衆說得方法

吾人は群衆の心的構成及び群衆の心を動かす動機は既に研究したるを以て、剩す所は是等の動機は如何にして勵かしむるか、又何人が之を有益に實際の用に立たしむるかの考査である。

第一節　群衆の指導者

若干の生物相集まるや、其の人間たると動物たるとを問はず、彼等は本能的に自ら首長の權威に服するものである。

人間の群にありては首長は往々發頭人乂は煽動者に過ぎぬも、彼等は斯かる資格を以て大なる役目を演ずるものである。彼の意志は群衆の意見の中核となり之を統一する。彼は異種の群衆を統一組織し、群衆を各黨派に組織する端を開き、終始之を指導する。群衆は主人なくしては何等の行動を爲し得ざる奴隷的集團である。

指導者は多〻、被指導者の一人として起つたものである。彼は先づ或る思想に依て催眠術を掛けられ、それより其の思想の宣傳者となるのである。彼は此の思想に全く囚はれ、それ以外のものは全く消え失せ一切の反對意見は彼に取ては誤謬か迷信に見えるのである。其の好實例は佛國革命時代のロベスピエールである、彼はルッソーの哲學思想に囚はるゝや、之を宣布する爲め宗教裁判所の如き方法を用ゐたのである。

吾人の所謂指導者は多くは思想家にあらずして活動家である。彼等は鋭き先見の明を持たない、又持ち得ない、是れ先見の明なるものは人を懷疑に陷れ、不活潑に流れしむるからである。彼等は殊に病的に神經過敏にして、憤激し易く、狂に近き程精神の錯亂せる人々の中より出る。彼等の觀念目的が如何に無稽であつても彼等の信念は到底道理を以て動かし難い程堅固である。輕蔑と迫害も彼等を動かすと能はず只益彼等を激勵するのみである。彼等は個人的利益、家族――一切を犧牲にして顧みず、自己保存の本能も全然忘失する。此時彼等の求むる唯一の補償は殉教のそれである。彼等の强烈なる信念は群衆に强力なる暗示を與へる。群衆は何時でも强固なる意志の人に從はんとして居る。群衆の中に集合したる人々は悉く意志の力を失ひ、本能的に、彼等の缺ける性質を有せる人に從はんとするものである。

諸國民は曾て指導者を缺きたるとはない。併し指導者は悉く宗教の使徒に固有なる强固なる信念に動かされて起つたものではない。是等の指導者は往々に

して唯自己の利益を追求し、卑しき本能に媚びて之を説服せんと努むる巧妙なる修辭家に過ぎざることがある。彼等は此の如くして偉大なる勢力を群衆に及ぼし得るも其の勢力たるや何時も一時的である。熱烈なる確信を以て群衆の心を動かしたる人々、假令ばピーター隱者、ルーテル、サヴオナローラ及び佛國革命當時の人士等は彼等先づ一個の信條に魅せられたる後始めて其の魅力を他に及ぼした。彼等は斯くして人をして夢の絶對的奴隷たらしむる信仰と云ふ恐ろしき力を、同胞人類の心裡に喚起することが出來るのである。

宗教的政治的又は社會的信仰の孰れたるを問はず、事業に對し、個人に對し、又は思想に對し信仰を起さしむることは、常に群衆の大指導者の職掌であつた。彼等が何時でも偉大なる勢力を有するは之が爲めである。人間の力の中最も偉大なる力は信仰である、聖書に信仰は山をも動かすと書いてあるのは尤な事である。人に信仰を與へるのは其力を十倍にするのである。歴史上の大事件は信仰の外殆ど何ものも有せざる名もなき信者に依て成されて居る。世界を風靡する

大宗教の建設されたのも、其の勢力世界の一端より他端に及ぶ大帝國の建設されたのも決して學者や哲學者の援助に依るものではない、況や懐疑者の力に於てをやである。

併し上述の例の如きは皆大先導者であつて其數極めて少なければ之を枚擧することは容易である。彼等は接續したる連鎖の絶頂を占めて居る、降て最底の一端に至れば木賃宿の一室の煙塵の立籠めたる中に於て、勞働者は自分にも能く分らぬ數句の常套語を、絶えず仲間の耳に吹き込み、之を適用すれば夢想も希望も皆之を實現し得べしと説て煽動して居る。

最上層より最下層に至る迄の孰れの社會に於ても、人一度孤立を棄つれば直ちに指導者の勢力下に服するに至る。多數の人々は自分の專門以外の問題に就ては、明晰にして合理的なる觀念を有するものでないから、指導者は之が先導者となるのである。或は新聞雜誌の如き定期刊行物が、不充分ながらも指導者に代ることがある、此時は新聞雜誌は讀者に速成の語句を與へて、彼等の推理考

察の煩累を除いてやるのである。

群衆の指導者は非常なる專制權を揮ふが、此の專制權は實に部下を服從せしむる一條件である。彼等が自己の權力を保持すべき何等の手段を有せずして、最も喧囂なる勞働者を如何に容易に其命令に從はしむるかは屢見る所である。彼等は勞働時間を定め、賃銀率を決し、同盟罷業を宣言す、罷業の開始も終熄も彼等が命を下す瞬間に決するのである。

現今に於ては此等の指導者煽動家は益官憲の權威を借稱するの傾向を生じ、官憲の權勢が疑はしくなり其の勢力微弱となるに從て、其傾きが殊に著しい樣である。群衆は此等の專制なる新主將には政府に服從したよりも尙ほ從順に服從する。故に何かの機會で指導者を奪ひ去れば群衆は團結力も抵抗力もなき舊の集合狀態に歸る。最近の巴里乘合馬車使用人同盟罷業の際、其の指導者二名を捕へたら直ちに之を終熄せしむることが出來た。群衆の精神を支配してるものは自由の必要にはあらずして服從の要求である。群衆は吾こそ主將なれと名乘

を揚ぐるものには、何人と雖ども本能的に之に服從する傾向がある。

是等の首魁、煽動家は之を二類に分つことが出來る。其一は精力絶倫なるも其の意志の力が間歇的に働くものにして、其二は第一に比すれば極めて希有にして其の意志の力が持續するものである。第一は猛烈勇敢大膽不敵の人物にして、咄嗟の間に決定されたる强暴なる企圖を指導し、危險を犯して群衆を率ゐ、昨日募りに應じ來れる新兵を化して豪傑たらしむるに殊に必要の人物である。ナポレオン第一世部下のネー、ミュラー二將軍の如き、又伊太利のガルバリヂの如き是れである。ガルバリヂは才能を缺きしも精力絶倫の冒險家にして、僅少の手兵を提げ、精練なる軍隊に依て防禦されたるネープルの古王國を征服して成功した英雄である。

併し此類の指導者の精力は要するに一時的で、刺戟を與ふる原因の去るや直ちに消失するものである。而して普通の生活狀態に歸ると、此類の精力に依て激勵された英雄は往々驚くべき品性の弱點を示す。彼等は他人を率ゐたけれど

も、極めて單簡なる境遇の下にありても、考慮省察其身を處する能力を缺いて居るらしい。此等の指導者は彼等自ら他に引卒され、絶えず刺戟を受け、常に一個人又は一思想を先導とし、明かに指示されたる進路を進むにあらざれば其の任務を盡すを能はざるものである。第二種の意志力の持續する人士は前者の如く其の生涯華々しからざるも之よりも遙かに大なる勢力を有する。宗教及び大企業の眞正なる建設家抔は此部類に屬する。假令ば聖彼羅、マホメット、コロンバス、レセップス抔は是である。彼等は聰明の人なるか偏狹の徒なるかは問ふ所でない、只天下は彼等に歸屬するのである。彼等の有する不撓不屈の意志の力は世間に其例少なく極めて强大なる勢力を有し一切のもの皆之に服從す。强剛にして持久力ある意志が如何なるものを爲し得るものであるかは未だ能く世人に知られて居ないが、何物も之に抵抗するものはない、自然も神も人も然りである。强剛にして持續的なる意志が如何なる大事業を爲し得るかを示す最近の例は、東洋と西洋とを分離し、三千年の間最も偉大なる君主が企てゝ成らざりし大事業を遂行した有名なレセップである。彼は後年同一の事業を企てゝ失敗したりしも其時は老齢の爲に失敗したのである。歳には何物も――意志も――抗するとが出來ない。

單に意志の力のみにて如何なる事を爲し得るかを示さんには、蘇西運河開鑿に關聯して打勝たねばならなかつた困難を物語る必要がある。同事業の目擊者たりしカザリス博士ば次の數行に不朽の開鑿者レセップが語りたる所に據りて其の困難を語つて居る。

「日々彼は運河工事に就きて恐ろしき物語を爲した。彼は彼の打勝たざる可らざりし凡ての障害、不可能事を如何に可能ならしめたるか、如何なる反對に逢ひたるか、如何なる聯合反抗運動を受けたるか、幾多の災害、失敗も彼を阻喪せしむると能はざりしかを物語れり。彼は英國が絶えず彼を攻擊して如何に彼と戰ひたるか、埃及及び佛蘭西は如何に躊躇したるか、佛國領事が工事の當初に於て如何に人に先んじて反對したるかを回想し、彼の遭遇したる反對の性質、清

水の供給を拒み勞働者を背き去らしめんとせる企圖を語り、如何に海軍卿及び技師、經驗あり學術的訓練ある責任者が彼に敵意を挾み、皆學術上の根據より災害の既に迫れるを確定し、日蝕月蝕を豫言する如く、其の災害の來るべき日時を豫言したるとを語つて居る」

是等大指導者の傳記を錄せる書は多くの名を擧げざるも是等の名は文明史上に於ける重要なる事件と關聯して居る。

第二節　指導者の行動手段、斷言、反覆、傳染。

若干時間群衆を煽動し、之をして宮殿を掠奪するとか、死を以つて要塞堡壘を防禦するとか、或る種の行動を取らしめんとせば急激なる暗示を與へて其心を動さねばならぬ、而して其の暗示の中効力の是も多いのは實例である。併し此の目的を達するには群衆が豫め或る事情に依て準備されねばならぬ。殊に群衆に作用を及ぼさんと欲する者は勢威てふ一性質を具有せねばならぬ、此の勢

威に就ては尙ほ後章に於て研究する積りである。

併し思想及び信條――例令ば近世の社會的原理の如き――を群衆の心意に浸潤せしめんとせば指導者は色々の方法を取らねばならぬ。其の主なるものは斷言、反覆、及び傳染の三方法である。是等の方法の作用は稍緩慢なるも、其の効果は一度生ずると極めて永續的のものである。

推理や立證の煩累なき純正簡明なる斷言は一思想を群衆の心意に注入する最も確實なる方法の一である。斷言が簡潔なれば簡潔なる程、煩はしき論證や證明の痕跡なければない程益重きを加へるものである。古來宗教的經典や法典は常に單簡なる斷言法を用ゐて居る。政治上の主義綱領を辯護せねばならぬ政治家や、廣告を利用して商品の販路を廣張する商人等は斷言の價値を熟知して居る。

併し斷言は出來る丈け同一言辭を以て絕えず反覆せらるゝにあらざれば何等眞正なる勢を有するものでない。修辭學に唯一の重要なる修辭法がある、反覆即ち是であると言つたのはナポレオンであつたと覺えて居る。斷言せられた事

物は、反覆に依て、結局論證された眞理が承認せらるゝ如く群衆の心意に固定するに至るのである。

反覆が群衆に及ぼす勢力は、反覆が最も智能の發達したる人にすら大なる勢力を及ぼすを見れば諒解するとが出來る。此の勢力は反覆された言説が、結局吾人の行動の動機が鑄冶さるゝ所即ち吾人の心裡の無意識の境域に安定せらるゝより生ずるのである、或る期間を經過したる終りには吾人は反覆されたる斷言の首唱者が何人であるかを忘却し只之を信ずるに至る。廣告の驚くべき勢力を有するのは此の事情に依るのである。某チョコレートが最上品なることを百回も千回も讀で居る中には、諸所に於て同樣の噂を耳にしたる如き心持となり、結局其事が事實であるとの確信を有するに至る。又某散藥が最も有名なる人々の難病を救治した廣告を千回も讀むと、同種の病氣に罹りたる時之を使用して見ようと云ふ氣持になるものである。若し常に同一の新聞に於て甲は極惡人で乙は最も正直な人であることを讀で居ると、反對意見の新聞に於て全然反對の

記事を讀み慣れない限りは全くの事實である樣に信ずるに至る。斷言と反覆とに對して戰ふに足る力あるものは獨り斷言と反覆あるのみである。

斷言が充分に反覆され其の反覆が終始一致する時は一個の輿論と稱するものが形成されて有力なる傳染作用が起る。思想、感情、情操、及び信條は群衆の間に於ては細菌の如き强烈なる傳染力を持て居る。此の現象は多數相集まる時は動物にも認めらるゝ故極めて自然的の現象である。厩に居る一匹の馬が馬丁を嚙むと外の馬も之を摸倣する。數頭の羊が恐慌を起すと直ちに餘波が全群に及ぶ。人々相集りて群衆を成す時は諸の感情は急速に傳染する、恐慌の突如として起るは之が爲めである。發狂の如き腦膸の錯亂も亦傳染的である。狂人專門の醫者が屢狂氣になるは有名な話である。實に近頃人より動物に傳へらるゝ諸種の狂氣があることが傳へられて居る、例令ば恐場病の如きそれである。

多數の個人が傳染を受くるに彼等が同時に同所にある必要がない。凡ての人の心に一個の傾向を生じ、群衆に固有なる特質を與ふる事件の影響の及ぶ所は、

傳染は遠距離からも感ぜらるゝのである。人心が前に述べたる如き原因に依て影響を受け易く準備されて居る時は殊にそうである。之が好實例は一八四八年の革命である、同革命は巴里に勃發して、直ちに歐洲の大部分に波及し列國の帝位を振蕩した。

摸倣は社會的現象に於ては多大の勢力あるものであるが實は單純なる傳染の結果である。併し傳染の勢力に就ては既に述べたれば玆では十五年前に同問題に就て說いた所を引用するに止めて置かうと思ふ。余の說は其後他の著者に依りて敷衍せられて近刊の書中に論じられて居る。

「人間は動物の如く自然的摸倣の傾向を持て居る。摸倣は若し常に爲し易ければ實に人間生存の必要條件である。所謂流行なるものゝ勢力を彼が如く大ならしむるのは此の必要條件である。意見、思想、文學的表現、或は單純なる服裝の執れたるを問はず能く流行と相背反して進む程の勇氣あるもの幾人あるか。群衆の指導せらるゝのは議論に依るのではない實例に依るのである。執れの時代で

も小數の個人があつて殘餘のものに作用を及ぼし無意識なる群衆に依て摸倣せらるゝものである。併し是等の個人の懷抱する所が一般に認容せられた思想と餘りに深き差異があつてはならぬ、若し餘りに深き差異があると彼等を摸倣することが困難で從て彼等の勢力は皆無となる。餘りに其の時代より超越した人物が一般に其の時代に感化を及ぼすことのないのは之が爲めである。兩者を隔離する分界線が餘りに甚しいからである。歐洲人は優等なる文明の利益を有するに拘らず、東洋人に對して其の感化極めて微弱なるも、兩者の間隔餘りに大なるからである。

過去と相互摸倣の二重の作用は結局同國同時代の人々を一樣ならしめ、哲學者學者及び文學者の如き、此の二重作用の勢力を免るべき個人にありても、其の思想體裁に共通の風を生じ、之に依て直ちに彼等の屬する時代を認むることが出來る。或る一個人の何を愛讀せるか、平素何の業に從事せるか、如何なる環境の中に生活せるかを知るは其人と長く談ずるの必要なく直ちに之を知るこ

とが出來る。

傳染は極めて有力にして個人に或る意見を强て與ふるのみならず感情をも與へる。或る著作が――例令ばタンホイゼルの如き――一時世間より輕蔑せられ、數年後に至て曩に眞先きに批難の聲を擧げたる人々より驚嘆されるのも其の原因は傳染の作用にあるのである。

群衆の意思及び感情が擴がるのは殊に傳染に依るもので決して推理の結果ではない。今日勞働者の間に熟して居る思想觀念は居酒屋に於て斷言、反覆、傳染の結果として得たるものである。實に群衆の信條を創造する法式は孰れの時代と雖ども之と異ならないのである。ルナンが最初基督教を宣傳したる人々を居酒屋から居酒屋へ其の思想を宣傳して歩く、社會主義の勞働者に比較したのは道理のあることである。ヴォルテールは既に基督教に關して、基督教は百有餘年間最惡なる賤民の歸依を得たるのみと言つて居る。

余の今引用したる如き例に於ては、傳染は最初民衆の間に行はれ次で上流社

會に及んだ事も知られる。今日社會主義の教理に就ても同じことが行はれて居る、即ち今日は最初の犧牲となるべき人々の間に行はれ始めて居る。傳染は極めて有力なれば其の作用する所、個人的利害をも無視させるのである。

民衆に採用せられた意見が縱令不合理なることが明かに見えるものでも、結局大なる勢を以て最上層の社會に入込むのは之が爲めである。群衆の信條は常に多少高尚なる思想より胚胎し、而して此の高尚なる思想は其の發源地に於て往々何等の勢力なかりしことを思へば、下流社會が上流社會に反動を及ぼすのは不思議に思はれる。指導者煽動家等は先づ此の高尚なる思想に服從し、之を捉へ、之を曲解し、之を奉ずる一派を創造する。此の一派の人々は更に之を曲解して民衆の間に傳へる、民衆は又更に曲解の範圍を廣め、既にして一般民衆より眞理と認めらるゝに至ると、此の思想は舊の發源地に歸て國民の上流に感化を及ぼす。結局世界の運命を形成するものは理智なるも、其の手段は極めて間接である。思想を首唱した哲學者が黃土に歸してより長き歲月を經たる後、上

述の經路に依て、彼等の思索は始めて勝利の果實を結ぶのである。

第三節　勢威

斷言、反覆及び傳染に依て傳播せられたる思想は、時經るに從ひ勢威なる不思議なる力を獲得して大偉力を示すに至る。

人物でも思想でも世界に於て支配力を掌握したものは主として勢威と云ふ語を以て表示されたる不可抗力に依て其の權威を强行したものである、此語の意味は何人にも解し易いものであるが色々に用ゐられて居るので之に定義を與へるのは容易でない。勢威なる語は驚嘆又は畏怖の感情を含むこともある。否實は是等の感情が土臺となつて居ることさへある。併し全く是等の感情がなくも存立することが出來る。勢威の最大部分は死者即ち吾人が何等の畏怖を感じないものに依て所有されて居る。假令ばアレキサンダー、シーザー、マホメット、佛陀等之である。之に反して吾人の嘆賞せざる假想的生物——假令ば印度の地下宮に於

ける怪神の如き——が一大勢威を有することがある。

勢威は實は一個人、事業、若くは思想が吾人の心意に及ぼす一種の威壓である。此の威壓は吾人の批評能力を全く痲痺せしめ驚愕と尊敬を以て吾人の心意を充たすものである。斯くして起されたる感情は他の凡ての感情と同じく説明し得ざるも電氣に打たれた人の樣な感情を起すらしい。勢威は凡ての權威の源泉である、神も帝王も婦人も之なくしては人を支配することが出來ないのである。

勢威にも種々あるが之を二大項目に分つことが出來る。收得的勢威と個人的勢威である。收得的勢威は家名、財産、評判抔より結果するもので個人的勢威に關係がない事も出來る。個人的勢威は之に反して根本的に個人に固有せるもので、評判光榮財産と共存することも出來れば、之が爲めに强めらるゝことも出來るが、併し是等のものがなくも完全に存立することが出來るものである。

收得的即人工的勢威は最も普通見る所である。一個人が或る地位を得ることか、或る財産を有することか、又は或る稱號を有することか云ふ單純の事實が、縱令其

人の個人的價値が極めて輕微であつても彼に勢威を與へる。制服を着けた軍人、官服を裝ふた裁判官は勢威を有す。パスカルは裁判官に官服と臺の必要であることを道破して居るのは尤なことである。之なければ裁判官の權威は半減する。最も頑固なる社會主義者でも王侯を見れば幾分の印象を受けるのが常である。此の如き稱號を借すれば商人を掠奪する位は容易のことである。

余の今說いた勢威は個人の及ぼす勢威であるが、之と相併で見逃す可らざるものは意見及び文學的、美術的著作の及ぼす勢威である。此種の勢威は多くは蓄積した反覆の結果に過ぎない。歷史殊に文學史美術史は、何人も之を確證せんと努むることなき同一判斷の反覆に過ぎざれば、各人は學校に於て學びたる所を反覆するに止まり、遂に議論一定し何人も敢て容喙せざる人と事物を生ずるに至る。近世の讀者に取てはホーマーの通譚は確かに非常の退屈なる事なるも、誰か敢てそうと明言するものがあるか。又バルテノンは現在の狀態に於ては何等の感興を惹起せざる荒れ果てたる廢墟に過ぎざるも、其の勢威極めて大なるを

以て、吾人の眼には實際の狀況が映らずして、却て歷史上の種々の記憶が映ずるのである。勢威の特徵は吾人をして事物の眞相を看破せしめず、全然吾人の判斷を麻痺せしむる點である。群衆は常に而して個人は一般に、一切の問題に對して既成の意見を要求して居る。是等の意見の人氣に投ずると然らざるとは、其の眞理たると誤謬たるとに關係がなく只勢威の有無に依る。

扨て個人的勢威は如何。此の勢威の性質は上述の收得的人爲的勢威とは非常に差異がある。此の勢威は凡ての稱號凡ての權威に關係なき能力で、之を有する者は極めて少數である、此の勢威を有すれば、縱令周圍のものは社會的に自己と同等な者で、且つ自己に他を威壓すべき何等の手段がなくも、彼等に磁石の如き魅力を及ぼすことが出來る。即ち周圍の人に對して自己の思想感情を受け容るゝことを强い、丁度野獸使が自己を貪食し得べき野獸を服する如く、周圍の人々に自己の命を奉ぜしむることが出來るのである。

釋迦、耶蘇、マホメット、ジョアン・ダーク、ナポレオン等の如き群衆の大指

導者は、多量に此種の勢威を有し、彼等があの位地を得たのも此の勢威に依るのである。神も英雄も獨斷説も彼等の内部の力で世間に勝利を得るのである。彼等は外部より批議すべきものでない、外部より批議すれば直ちに其姿を消して仕舞ふのである。

以上引用したる偉大なる人物は名を爲す前に此の魅力を具有して居た、此力がなかつたら彼等は有名にならなかつたであらう。假令ばナポレオンは其の光榮の絶頂に於て、單に權力を有せりとの事實に依て非常なる勢威を有して居たが、權力なく全く名の知れざる時に幾分此の勢威を有して居たのである。彼が名もなき、一武將たりし時權勢家の保護に依て伊太利の佛軍指揮の爲め派遣されたが、該軍隊の猛將連は本國より派遣されたる此の青年將校に敵意を示さんとして居た。然るに彼が伊太利に到着して初めて彼等に會見するや、言辭を費さず、身振を爲さず、威嚇を示さず、只此の未來の大偉人を見たばかりにて彼等は征服されて仕舞つた。テーヌは當時の備忘錄より取りたる此の會見の不思議なる物

語を傳へて居る、曰く

「師團の將校連は巴里より彼等に派遣されたる此の小なる成上り將校に對して惡意を以て參謀部に到着した、其中にはアウジユローも交り居たるが彼は不羈豪雄にして己れの身長と勇敢を自慢して居た。彼は新參の將校に就て聞きたる所に據り之に服從せず之に無禮を加へん心構へで居た。彼の聞いた所に據るに新參將校はバラー恩顧のものでヴアンデミエール事件に依て地位を得、市街戰に依りて名を擧げたもので、常に寂寥の中に獨り思索に耽るを樂しみたる故熊の如しと言はれ、風采揚らず數學家、夢想家の評判を取つた男であつた。彼等は軈て案内されて入り來りたるが、ナポレオンは暫く彼等を待たし置き、遂に劍を帶びて入り來り帽子を被つて方略を説明し命令を與へ退出を命じた。アウジユローは始終沈默して居た、屋外に出でゝ始めて吾に歸り例の罵詈を始めるとが出來た。彼はマツセナと共に此の小惡魔の新參將軍が彼に畏怖の感を與へたることを認め、どうして始めより吾知らず威壓を受けたか譯が分らないと白狀し

た。」

彼は偉大となるに從て其の勢威は光榮と共に增し、遂に彼に心を歸したる人々に取ては一個の神の勢威に等しきものとなつた。アウジユローよりも更に獰猛にして革命の代表的軍人たりしヴアンダム將軍は、一八一五年一日チエイレリー宮の階段を上りながらダルナノ元帥に語りて曰く「彼の魔人は余に對して何とも說明の出來ざる魅力を浴びせ掛けた、神も惡魔も恐れぬ余も彼の面前に於ては小兒の如く戰慄しそうになる、彼は余に命じて針頭の孔を拔けて火に入らしむることも出來るのであると。

ナポレオンは彼に接觸した凡ての人に之と同樣の魅力を及ぼした。

ダヴースはマレーと自己の崇拜心に就て常に語つて居た「若し皇帝が吾々に對して一人も殘さず一人も逃さず巴里市全部を破壞するは、余の政策上極めて重要なりと語らば、マレーは克く秘密を嚴守するも自己の家族を市外に逃がし遣る丈けの計は爲さずに居られない。之に反し余は秘密の漏洩を恐れて妻子を

市中に止まらせる」と。

彼の專制に倦み疲れて居ると思はるゝ一大國の、組織ある軍隊の對抗を受けた孤立せる一個人が、不思議にもエルバ嶋より遁れ歸りて電光石火の間に佛國を征服した所以の道理を了解しようとせば、此種の魅力の及ぼす驚くべき偉力を記憶する必要がある。彼を捕縛の爲め派遣され、其の使命を果さんと誓言したる諸將軍にナポレオンは只一瞥を與へれば充分であつた、此の一瞥で一言もなく彼等はナポレオンに服從したのである。

英國のウールスレー將軍の記に曰く「ナポレオンは彼の王國たりしエルバの小嶋より一個の亡命者として單身佛蘭西に上陸し、僅か數週間內に一滴の血を流さず、正當の國王を戴ける佛國の凡ての權力を顚覆するに成功した。一個人の優勢を之より以上に確立するは成し得べきこととも思はれない。而かも彼は彼の最終の戰役たりし此役の始より終に至る迄歐洲の同盟國に對して强大なる威壓を加へ、彼等に對して常に先手を打ち殆ど彼等を粉碎せん瀨戸際迄行つた

のであると。」

彼の勢威は彼の死後に殘り益增大したり。彼の名もなき甥をして帝位に上らしめたのは彼の勢威である。彼に關する世人の記憶の如何に有力なるかは彼の傳說が今日續々復活するのを見ても分る。人若し充分の勢威と之を保持するに必要なる才能を有すれば、如何に人を虐遇するも、幾百萬の人命を損するも、幾多の侵略を惹起するも何人も之を妨ぐるものがないのである。

以上余の引用したる所は皆勢威の例外の場合であるが大宗敎、大敎儀、大帝國の起る所以を明にするに必要なる例である。若し勢威に依て群衆に偉大なる勢力を及ぼすことなければ斯かるものゝ起るは了解す可らざる事である。

併し勢威は單に個人の優勢や軍事上の光榮や、宗敎的恐怖を基礎としてのみ起るものでない、時としては之よりも平凡なる源泉より出でゝ其の勢力の顯著なるものがある。現世紀に於ても幾多の例を擧げることが出來る。最も顯著ある例の一は二大陸を分割して地球の表面と各國民の通商關係を變化したるレセッ

プ氏の話である。彼が蘇西運河開鑿に成功したるは其の意志の力に依るけれども又周圍の人に及ぼしたる魅力に依るのである。彼は自分の遭遇した反對に打勝つには自分の顏を見せさへすればよかつた。彼の言は單簡なるも彼の魅力に依て敵も忽ち味方となつた。英國人は殊に彼に反對したものであつたが單に英國に赴いただけで凡ての反對者を糾合することが出來た。後年彼がサヾンプトンを通過した時は沿道の敎會は鐘を鳴して之を迎え、今日に於ては彼の爲めに紀念像を建てる計畫迄して居る。彼の生涯は勢威の如何に發生し如何にして亡ぶかを吾人に敎ふるものである。彼は其の偉大なる點に於ては歷史上最も有名なる諸英雄と相競いたる後、自國官憲の爲め最惡なる罪人の列に落された。其の死するや彼の棺は見送る人もなく冷淡なる群衆の中を通つて行つた。歷史上最大偉人の雄魂を弔ふ如く彼に敬意を表したものは外國の君主のみであつた。

如上引用したる例は皆極端の場合を示すものである。勢威の心理を詳細に說くには此の如き極端の場合を擧ぐる必要があるのであるが、大は宗敎及び帝國

の建設者より小は新調の上衣又は裝飾に依て隣人の耳目を聳動せんと努むる輩に至る迄皆勢威の一例を示すものである。

文明を構成する種々の要素――科學、藝術、文學等――より結果する各種の勢威は此の兩極端の間に位するのである。勢威が人を說得する根本要素たるとは之でも見らるゝのである。勢威を有する人、思想觀念又は物は、意識的又は無意識的に直ちに傳染の結果として一般に模倣せられ、一時代の人々をして悉く或る感情及び或る思想發表の方法を採用せしめる。而して此の模倣が又無意識に行はるゝ故完全に行はれる。彼の近世の畫家にして原始人の靑褪めたる着色法及び質朴なる描寫法を模寫するものは、彼等が如何なる動機に依て之を採用するに至りたるかは殆ど知らず只藝術に對して眞實なるより之を爲すものと信じて居る。併し若し一人の優逸なる名畫伯が此の描寫法を復活しなかつたら、人々は質朴拙劣なる點の外は何等優逸なる點を認むることが出來なかつたであらう。他の名畫伯に倣ひ其の畫布を紫影を以つて充たす畫家は自然界に於て五十年以

前に見たるよりも多くの紫影を見た爲めにあらず、其の畸異なる畫法に拘らず偉大なる勢威を得るに成功したる畫家の影響暗示を受けたる爲めである。文明の各要素に關聯して此類の例を擧ぐれば數へ切れぬ程あるのである。

是に由て之を觀れば勢威を發生するには幾多の要因があることが分るが、其中にも成功は何時も最も重要なる一である。成功した人、一般に認められた思想は實際他より疑問を挾まれることがない。成功が勢威を得る主要なる階段の一たる證據は、成功が消滅すると勢威も次で消滅するので明かである。昨日歡呼を以て群衆に迎えられた英雄が今日輕蔑せらるゝは失敗の爲めである。而かも勢威大なれば大ある程反動も益々大となるであらう。此の場合には群衆は失脚せる英雄を自分等と同等者と認め從來優者として之に服從したるに對して復讐する。ロベスピエールが同僚及び同時代の人々を死刑に處して居た時は强大なる勢威を揮ひしが、一朝數個の投票の移動に依つて權力を失ふや、其の勢威忽ち失墜し群衆は曩に死刑に處せられし人々に與へたと同樣の惡罵を加へて彼を斷頭臺

に送つた。熱心なる信仰者は昨日迄神と崇めたものの偶像は必ず怒て之を破壞するものである。

成功の缺乏に依て失はれた勢威は霎時の内に消え失せる。勢威は又論議に附せらるゝ爲めに自然に衰へる。論議の勢威を害する力は非常である。勢威は一度疑問に附せられたら、其の瞬間から最早勢威たる實を失つて仕舞ふのである。神にしても將た人にしても、長く勢威を維持したものは、決して他の論議を許さない。群衆の嘆稱を得んとせば、之を遠隔の地に置かねばならぬ。

第四章　群衆の信條及び意見の變化の範圍

第一節　固定的信條

生物の解剖上の特質と、心理學上の特質との間には密切なる類似點がある。解剖上の特質の中には、變化す可からざる要素、換言すれば地質學上の幾年代を經て僅かに變化するものと、極めて變化し易くして飼養者又は園藝家の技術

に依て容易に變化し得るもの、時としては不注意なる觀察者では其の根本的特質を看破すると能はざる迄に甚しく變化し得るものとの二つがある。

同樣の現象は道德的特質の場合にも見られる。一人種の不變的心理的要素と相幷で、可動的易變的要素がある。一民族の信條意見を研究するに於て、變化し易い意見が、丁度岩石の表面の砂土の如く、固定せる地盤の上に植ゑ附けられてあるのを見るのは之が爲めである。

然らば群衆の意見及び信條は明確に二分することが出來る。一は數百年間に亘て永續する恒久的大信條であつて、一文明全體の基礎である。例令ば過去に於ては封建主義、基督敎、新敎主義の如き即ち是で、現代に於ては民俗的國家主義、民主思想及び社會思想抔是れである。第二は一時的易變的意見であつて、各時代に發生し消滅する一般的觀念の結果として生ずるもので、例令ば文學美術の理論——浪漫主義、自然主義、神秘主義等を生じたる理論抔是である。此種の意見は一般に一時の流行の如く皮相的で變化し易く、丁度底深き湖水の表

面に立騒ぐ小波の如きものである。

偉大なる一般的信條は其數が極めて少ない。而して是等の信條の興亡隆替は各民族の歴史の最高點を爲して居る。是等の信條は文明の實際の骨子である。

群衆の心意に一時的意見を浸潤せしむるは容易なるも、永續的信條を植ゑ附けるは極めて困難である。併し一度此の永續的信條を植ゑ附けると、之を根絶するとも同じく極めて困難である。之を變化するは通例激烈なる革命の犠牲に依て始めて出來る。革命と雖ども此の如き信條が民心に對する支配力を失つた時に於て始めて効を擧ぐることが出來る。此際に於て革命は、既に殆ど廢棄せられたるも只習慣の力に依て辛じて餘命を保ち居るものを、最後の一撃にて掃蕩するの役目を演ずるのである。革命の發端は實は信條の終焉の時である。

一大信條の最後の運命に遭遇すべき時期は容易に認むることが出來る、即ち世人が該信條の價値を問ひ始むる時がそれである。一切の一般的信條は一個の假設に過ぎざる故、試驗に附せられざるを條件として始めて存立することが出來る

のである。

併し信條の動搖したる時と雖ども、此の信條が發生せしめた諸制度は、其の勢力を保持し極めて徐々と消滅する。最後に至て信條が全然其の力を喪失した時は、其の基礎の上に立ちたるものは悉く急に崩壞して仕舞ふ。併し如何なる國民と雖ども同時に其の文明の諸要素を變更すべき運命に逢はずして、其の信仰を變更し得たものは曾てないのである。國民は一の新たなる一般的信條に逢着して、之を採用するに至る迄、此の文明の要素變更の過程を繼續して行くのである。其の時の來る迄は思想上無政府の狀態に居るのである。一般的信條は文明の缺く可らざる支柱で、思想の方向を定むるものである。信仰を鼓吹し新たに義務の觀念を發生せしむるのは只此ものあるのみである。

各國民は一般的信條を獲得するの利益を知り、又該信條の消失は國民自身衰亡の徴たるを本能的に諒解せり。羅馬人の場合に於ては、羅馬の狂熱的崇拜は彼等をして世界の支配者たらしめたる信條であつて、其の信條の消滅したる時

は、羅馬が滅亡の運命に遭遇すべき時であつた。又羅馬の文明を破壞したる蠻人は如何と云ふに、彼等が結合の手段を得、無政府狀態より脫出し得たるは或る共通に認容したる信條を得たる後のことである。

諸國民が其の意見を擁護する爲め、常に不寬容の精神を示したのは決して無用でなかつたことは明かである。此の不寬容の精神は、哲學的見地より見れば批難すべき點もあるが、一國民の存立より考へれば最も必要なる美德である。中世紀に於て幾多の犧牲者が慘刑に處せられ、幾多の發明家、創始者が縱令殉敎者たるの運命を免れても尙ほ絕望の中に其命を殞したるは、一般的信條を創設し又は保持せん爲めであつた。世界が屢戰亂の巷となり、幾百萬の人士が屍を戰場に暴し、今後に於ても尙此の如くせんとするは皆是れ此の信條擁護の爲めである。

一般的信條を樹立するは極めて困難なるも、一度確立せられると將來に亘りて長く絕大なる權力を有し、哲學上より見れば如何に誤謬であつても、睿智最

も優れたる人迄之を信奉するに至るものである。歐洲の諸國民は、仔細に檢察すればモロクの傳說と異なる所なき野蠻なる宗敎上の傳說を、一千五百年以上も、疑ふ可らざる事實と見做して居た、神が其子に恐るべき苦痛を與へて、人間の不柔順に復讐すと言ふ如き妄誕無稽の傳說が幾百年の間も其の不合理を看破されすに傳つて來たのである。ガリレオ、ニュートン、ライプニッツの如き希世の大天才も、此の如き獨斷說に疑問を挾み得べしとは夢にも思はなかつた。是れ實に一般的信條の魅力と、吾人の睿智の及ぶ範圍の狹少なるを示す好適例である。

新たなる獨斷說が群衆の心裡に植ゑ附けられると、之が皷吹作興の源泉となり之より制度、藝術、生活方法が生れ出づるのである。是等の事情の下に於て獨斷說が人心に及ぼす勢力は絕對的であつて、實際家は承認せられたる信條を實現せんとする外に他意なく、立法者は之を應用せんとする外に餘念なく、哲學者、美術家及び文學者は專ら種々なる形式の下に之を表現せんことに努むる

外はないのである。

根本的信條より一時的附隨的思想の起ることあるも、是等の思想は必ず其の本源たる信條の痕跡を留める。埃及の文明も、中世紀の歐洲文明も、及び阿拉比亞人の回々教文明も皆少數なる宗教的信條の結果であつて、此の信條は是等文明の些細なる要素にも其の痕跡を留め、之を見れば其の何文明に屬するかは直ちに知ることが出來る。

各時代の人々が、彼等を悉く同一模型の人物たらしむる網細工の中に包まれて、之より拔け出づることの出來ないのは、此等の一般的信條に依るのである。人間は殊に其の信條と、信條の結果たる習慣に依て其の行爲を指導されるもので、是等の信條と習慣は吾人の日常の瑣細なる行爲迄規定し、最も獨立的精神に富んだものでも、其の感化影響を免がるゝことは出來ない。無意識の中に人間の心意に勢力を及ぼした壓制は、唯一の眞正なる壓制と言ふべきもので、何ものも之と戰ふことが出來ない。タイベリアスや、成吉思汗や、ナポレオンは

强大なる暴君たりしに相違はないが、モーゼや、佛陀や、耶蘇や、マホメットは苦深き墓の中より人の心靈に對して、更に深甚なる壓制を加へて居る。陰謀を以て或は暴君を倒すを得べし、併し確立したる信條に對しては陰謀も何の役に立つことがあるか。佛蘭西革命は羅馬が加持力教との激戰に於て敗を取つたのである、群衆の同情は明かに革命にあるに拘らず、又宗教裁判の如き破壞手段を講じたるに拘らず敗北したのである。是に由て觀れば之迄人間が暴君と爲したるものは、皆遠き古の死者の記憶か、人間自ら作り出した迷想であつたのである。

一般的信條には往々にして哲學上甚しき不合理の事があるが、此の不合理は毫も該信條が勝利を得る妨げとはならない。否妨げとならないのみならず、若干神秘的不合理の分子がなければ勝利を得ることが出來ないのである。故に今日の社會主義者の信條には明かに弱點があるけれども、社會主義は之が爲めに民衆の間に傳播するを妨げらるゝものではない。只宗教上の信條よりも劣る所

は、宗教上の信條の供給する幸福の理想は、單に未來に於てのみ實現せらるべきものと爲す故に、何人も之に抗爭すること能はざる點である。然るに社會主義の理想は、地上に於て實現せんとするものなるを以て、實現に着手するや否や、其の約束の空言なることが直ちに明かに知らるゝ故、之と同時に新たなる信條は全く其の勢威を失ふ。故に斯かる信條の勢力は、愈勝利を得て、其の事實上の實現が始まる時迄益隆盛を加ふるに過ぎない。此の如き理由ある故に、新宗教たる社會主義は、最初は從前の諸宗教の如く破壞的勢力を及ぼすも、將來に於て創造的役目を盡すことは出來なからう。

第二節　群衆の變り易き意見

以上述べた固定的信條の地層の上に、絶えず發生し消滅する一時的の意見觀念及び思想がある。其中に或ものは一日にして凋衰し、一層重要なるものに至ても一代と續くものがない。吾人は既に、此種の意見に行はるゝ變化は、實際

の變化よりは寧ろ皮相的變化にして、人種の特質の異同に依りて影響を受くるものであることを說いた。例令ば佛蘭西の政治制度を說いた時、吾人は諸黨派——王黨、急進黨、帝國黨、社會黨等——は其の外觀全く異なるも、其の理想は絶對に同一なること、他の人種にありては全然反對の理想が同一の名目の下に現はれて居るを見れば、此の理想は全く佛國民の心的組織に依ることを說いた。諸の意見に如何なる名稱を與へても、又虛僞の改作を加へても、事物の心髓を變更しない。佛國大革命の際の人士は、羅典文學に心醉し、羅馬共和國に着目し、其の法律、服制、調度抔を採用したが、羅馬人とはならなかつた、是れ彼等が强力なる歷史的暗示の支配を受けたからである。哲學者の仕事は、表面的變化の下にありて如何なるものが古來よりの信條なるかを調査し、變遷極まりなき諸々の意見の中に於て、一般的信條及び人種の精神に依て決定せらるゝは、如何なる部分なるかを判斷するにあるのである。

此の哲學的識別がないから、群衆は隨時隨意に其の政治的信條又は宗教的信

條を變更する如く思はれることがある。政治的、宗教的、美術的、文學的の孰れたるを問はず、凡ての歴史は皆此言の眞なることを證する樣である。

今一例として佛蘭西の歴史に就き、極めて短期間の一節、一七九〇年より一八二〇年に至る三十年間の一期間、即ち丁度一代間の事を察して見るに、群衆は最初王政主義より革命主義となり、次で極端なる帝政主義に變じ、更に前の王政主義に歸て居る。又宗教上に就て見ても、群衆は同期間に於て最初は舊教主義より無神主義となり、次で有神主義となり、最後に最も明白なる舊教主義に立歸て居る。此等の變化は啻に民衆の間に起るのみならず、又民衆を指導する人々の間にも起る。誓て國王の仇敵となり、神も君主も認めざる國民議會の選出した議員等が、ナポレオンの忠僕となり、次で路易第十八世の治世には、恭しく蠟燭を捧持して宗教上の行列に加はりたるは、吾人の喫驚する所である。

其後の七十年間に於ても、群衆の意見の變化は數限りもない、第十九世紀の當初に於ては不信なるアルビオンと稱せられたる英國は、ナポレオンの繼承者

の下に於ては、佛蘭西の同盟國となり、二回佛蘭西より侵入された露國は、佛蘭西の逆境を滿足氣に見遣りしが、今や佛蘭西の友邦である。

文學、美術、哲學に於ては、意見の連續的變遷は一層急速である。浪漫主義、自然主義、神秘主義は交互に現はれたり、消えたりして居る。昨日喝采を浴びせられた美術家や著者は、翌日は甚しき侮辱を加へられて居る。

併し外觀上此の如く深甚なる變化を解剖したら吾人は何ものを發見するか。一般的信條及び人種の感情に反對する變化は一時的にして、他の方向に外れた流れは直ちに本流に立歸るを見るのである。一般的信條又は人種の感情に關連せざる僞め、確實なる基礎を得ること能はざる意見は、周圍の境遇の變化に從て變化するを免れない。此等の意見は暗示と傳染に依て形成されるものであるから、常に一時的であつて、丁度風に依て作り上げられたる海岸の砂山の如く、其の時々の場合に依て出現したり消滅したりするのである。

群衆の變化し易い意見は、今日に於ては從前よりも更に其數を增して來たが、

之には三個の異なる理由がある。

第一の理由は舊來の信條は益其の勢力を失墜し來つたので、往時に於ける如く一時の應急的意見を構成することがなくなつた。一般的信條の衰微は過去も、未來もなき偶發的意見を發生せしむる素地を作つたことである。

第二の理由は、群衆の權力が增大し、之を防止するもの益少なくなりたる爲め、群衆の特性たる極端なる意見の動搖は、何等の障害を蒙むることなく發現することが出來ることである。

最後に第三の理由は、近頃新聞が發達し、最も相反せる意見が絶えず群衆の注意に上ることである。各個の意見より出づる暗示は直ちに反對の意見の暗示の爲めに破壞せらる。其の結果は如何なる意見も廣く普及するに至らず、皆一時的にして終る、今目に於ては一意見出づるも一般に受け容れられる程普及しない中に消滅して仕舞ふのである。

以上の三原因より、世界歷史に於て全く新たなる、而して現代の一大特徵た

る現象が現はれて來た、外ではない政府と言ふものが一般意見を指導する力を失つたことである。

今を去ること遠からざる過去に於ては、政府の行動、少數の著作者及び少數の新聞紙の勢力は、輿論の眞正なる反映者なりしが、今日に於ては著作者は全く勢力を失ひ、獨り新聞紙のみ輿論を反映して居る。政治家は如何と言ふに輿論を指導する所ではない、輿論に從ふことを努むるばかりである。彼等は輿論を恐れ、時としては震駭し、全く動搖定まらざる行動を取ることがある。

是よりして群衆の意見は、益政治上に於ける至高なる指導的主義、原理となる。今日に於ては群衆の意見は、國際間の同盟をさへ作らせるに至つた、此頃出來た露佛同盟の如きは、全く民衆運動の結果である。現代の奇異なる徵候は、法皇、國王、皇帝が、或る問題に關する彼等の意見を、群衆の判斷に附する方法として會見を受くることを承諾して居る事である。往時に於ては政治は感情問題にあらずと言つても間違ではなかつたらうが、今日に於ては政治は、理性

の感化影響を受けず、只管感情に指導せらるゝ變化し易き群衆の衝動に依てのみ支配せられる樣になつて居るから、政治は感情問題にあらずと言ひ得るや否やは疑問である。

往時輿論を指導した新聞紙は如何と言ふに、今日に於ては政府と同じく群衆の勢力の前に屈服するに至つた。新聞紙は疑もなく顯著なる勢力を揮ふて居るが、之は群衆の意見と、其の意見の絶えざる變化とを反映するからである。今や新聞は單に報道供給の機關となつて仕舞つて、或る思想、教儀、主張の努力は全く棄て、輿論變化の後を追ふてばかり行く樣になつた、競爭の必要上讀者を失はんことを恐れ餘儀なく此に至つたのである。古くより基礎確實にして勢力ありたるコンスチチユーチヨンネル、デバー、シエークル等の諸新聞は前代に於ては其の所說は神說として迎えられたものであるが、今は全く廢刊せられるか、然らざるも模型的近代新聞紙となり、其の報道の最大多數は輕易なる記事、巷說雜談、及び金融上の放言の間に挿入される樣になつた。今日では其の寄稿

家に獨自一個の意見を吐かしむる程財政裕かな新聞はない、此の樣な意見は讀者に對して何等の重きをなさない、今日の讀者は報道と娛樂を求むるばかりで、苟くも斷言的論議を爲すものあれば、直ちに何等か投機的動機に出でたるものと疑ふのである。批評家と雖ども一の著書又は演劇の成功と否とを斷言することが出來なくなつた、批評家は害を與へることは出來るが利益を與へることは出來なくなつた、各新聞紙は批評とか個人的意見とかの全く無用なるを知り、今日にては文學的批評を中止し、書籍の標題を揭げて之に二三行放言を加へて止めて居る。今後二十年內には劇評も多分同樣の運命に會することであらう。

輿論の趨勢を嚴密に注視することは、今日の新聞紙及び政府の主要なる仕事となつた。一事件、立法上の一提案、一演說の如何なる結果を生じたかは、絶えず、彼等の知りたいと思ふ所である。併し群衆の思想程動き易く變じ易きものはなく、群衆が昨日稱讃したるものを今日罵倒する程屢起るものなければ、之を知ることは容易の業ではない。

此の如く輿論を指導するものは全く缺如し、同時に一般的信條は破壞される爲め、其の終局の結果として、各種の確信は極端に分離し、群衆は自己に直接利害關係を有せざる一切の事物に對して、益冷淡無頓着となつて來る。社會主義の如き教儀に關する問題は、全く無學なる階級、例令ば鑛山及び工場の勞働者の仲間より眞に確信ありと誇る選手を出し得るのみである。中流社會の下級者及び若干の教育を受けた勞働者は、全然懷疑的であるか、若くは其の意見が極端に動搖して居る。

最近二十五年間に於ける此の方面の進化には實に驚くべきものがある。是より先きの時代に於ては、時代が比較的尙ほ吾人に近かりしも、世人の意見は尙ほ或る一般的の傾向を有して居つて、或る根本的信條の承認を源として之より出て居つたものである。或る一個人が王黨だと言ふだけで、彼は必然に歷史に於ても科學に於ても明確なる觀念を持つて居り、共和黨員と言ふだけで全く之に反した觀念を持て居た。王黨員は人間の祖先は猿にあらずと確信し、共和黨は人間

は事實猿より出でたるものと確信して居た。佛國大革命に言及する時は、王黨員は之を貶して恐るべき禍亂と爲すを義務とし、共和黨員は之に敬意を表するを義務とした。又一時はロビスピエールやマラーの如き名は宗教的敬虔の念を以て稱せられ、シーザー、アウガスタス又はナポレオンと云ふ樣な名は、必ず罵詈讒謗を浴びさせられたものである。佛國ソルボンヌ大學に於てさへ、此種の眞卒なる歷史の解釋法が一般に行はれた。

今日に於ては討議や解剖の結果として、凡ての意見が其の勢威を失墜し、明晰なる特徵は急速に消磨し、殘存するものと雖ども吾人の心血を沸かしむる樣なものは殆どない。現代の人は漸次冷淡を特色として來た。

意見の一般に消磨し去るは如何にも慨嘆に堪へざることで、是は國民生活の頽廢の兆候たることは爭ふ可らざることである。偉大なる、殆ど超自然的洞察力を有する人物、即ち使徒とか、群衆の指導者——一言にして言へは、純正にして强烈なる確信を有する人士——とかは、事物を否認し、批評する人、或は

冷淡なる人士よりは、遙かに偉大なる勢力を民衆に及ぼすは明かなることである。併し現今の如く、群衆が强大なる權力を有する時、或る單一の意見が充分なる勢威を得て、一般に認容される樣になつたら、忽ちにして凡てのものが其前に屈服し、自由討議の時代は、長く去るべきを忘れてはならない。群衆は主君としては、時々、ヘリオガバラスや、タイベリアスの如く、與し易き主君たることあるも、亦非常に氣の變り易い主君である。從て一文明が群衆の支配の下に置かるゝに至る時は、激しき變化に飜弄せられて、長く繼續することが出來なくなる、此時に際し、其の文明衰退の時期を幾分でも延ばし得るものがありとすれば、それは群衆の意見の極端なる動搖と、一般的信條に對する群衆の冷淡無頓着である。

第三卷　各種の群衆の分類と說明

第一章　群衆の分類

吾人は既に本著に於て、心理的群衆に共通の一般的特質を說いた。是より吾人の指摘すべきは、各種の集合體が、適當なる作興的原因に依て、群衆に化する時現はるゝ特殊の性質である。先づ數言群衆の分類より始めよう。

吾人は先づ單純なる集團を出發點とする。其の最も劣等なる形式は、人種を異にする個人の集團である。此の場合には、此の集團を結合する唯一の紐帶は、多少人々より尊重せられて居る團長の意志である。數百年間羅馬帝國を侵掠したる、各其の出所を異にする蠻人は、此種の集團の好適例である。

此の集團より一段上の集團は、或る勢力の下に共通の特質を獲取し、遂に單一なる人種を形成するに至りたるものの是である。是等の集團は時として、群衆に特有の性質を示すも、此等の性質は人種的考慮より多少統制せらるゝものである。

此の二種の集團は、本書に於て研究したる或る勢力の下に、組織的即ち心理的群衆に變化することが出來る。而して吾人は此の組織的群衆を左の如く分類

しようと思ふのである。

(甲)不等質的群衆
- 一、無名群衆(例令ば街上の群衆等)
- 二、無名ならざる群衆(例令ば陪審官、議會等)

(乙)等質的群衆
- 一、黨派(政黨、教派等)
- 二、閥(武人閥、僧侶閥、勞働者閥)
- 三、階級(中等階級、農民階級等)

是より簡單に此の三種の群衆の特質を説いて見よう。

第一節　不等質的群衆

吾人が本書に於て今迄研究したるは、此の集合體の特質である。此の集合體は各種の個人、各種の職業、各種の智識程度のものより成るものである。人は活動して居る群衆の中に投じた丈けで、其の集合的心理は個人的心理と根本的に相違し、其の智識は此の分化に依て影響を受くることは、今や吾人の

研究の結果として知つて居ることである。又吾人は智識は集合體に於ては勢力を有せず、集合體は無意識的感情の支配を受くるものであることを知つた。

根本的要素即ち人種的要素は、各種の不等質的群衆をして可成りに深き分化を爲さしむるものである。

吾人は既に人種の務めたる役目に屢言及し、人間の行爲を決定する最も有力なる要素は、人種であることを示したが、人種の作用は群衆の特質にも之を認むることが出來る。今偶然に或る個人が集まりて群衆を成したりとし、其の群衆が悉く英國人か、又は支那人なる時は、悉く露西亞人か、佛蘭西人か、又は西班牙人なるよりも、大に其の特質を異にするものである。

各人種の遺傳的の心的構成が互に相異せる結果、感情思想の方式にも非常に懸隔を生ずるものである。而して此の懸隔は、國籍を異にする個人が、同一の群衆中に、殆ど相等しき割合を以て集合する樣な事のある時は、際立て見ゆるもので、此の懸隔は、斯かる群衆を集合せしむるに至つた利害關係が表面同一

であつても起るものである。社會主義者が其の大會に、國を異にする勞働者の代表者を集合せしめんと努力しても、何時も最も大なる不調和に終るのは之が爲めである。羅典人の群衆は、如何に革命的又は保守的と想像せらるゝ時でも、必ず其の要求を實現するに國家の干渉を求め、著しく中央集權、獨裁政治に向ふ傾向があるが、英國人又は米國人の群衆は、之に反し國家に依賴することを爲さず、專ら一個人の自發心に訴へる。佛蘭西の群衆は特に平等に重きを置き、英國の群衆は自由に重きを置く。同じく社會主義、民主々義と言ふも、之を主張する國民の異なるに從て皆其の色彩を異にするは、此の人種的區別がある爲めである。

由是觀之人種の精神は、群衆の性向の上に至大の勢力を及ぼすものである。群衆の氣質の變更を制限するものは、此の有力なる基礎の力である。群衆の劣等なる特質は、人種の精神が强くなるに從て、其の勢力が弱くなるは、根本的法則である。群衆の狀態及び群衆の優勢は、野蠻の狀態に等しいか、野蠻の狀

態に復歸するに等しいものである。人種が多少群衆の妄動力の羈絆を脫し、野蠻狀態より脫出するのは、堅實なる集合的精神を獲取するに依るのである。人種的要素を離れて爲し得る、唯一の不等質的群衆の分類法は、街上群衆の如き無名群衆及び、合議的集會及び陪審官の如き、無名ならぬ群衆とに分つにある。第一の群衆に缺如し、第二の群衆に發達せる責任の情は、兩者の行爲に非常に相異せる傾向を與ふるものである。

第二節　等質的群衆

等質的群衆は第一黨派、第二閥、第三階級の三である。

黨派は同種的群衆を組織する過程の第一歩である。其中には教育・職業、及び所屬社會の階級を異にし、只共通の信條を以て連結されてる個人を含む。教派とか政黨とかは其の實例である。

閥は群衆の感知し得る最高度の組織を示す。黨派は職業を異にし、教育の程

度を異にし、社會的境遇を異にし、單に共通の信條を以て互に連結せらるゝものであるが、閥の方は同一職業の個人より成る故、從て教育の程度も同じく、社會的身分も大に似て居るのである、軍人閥、僧侶閥などそれである。

階級は其の起源を異にする個人より成り、黨派の如く信條の共通なるに依て結合せらるゝにあらずして、又閥の如く同一職業に依て結合せらるゝにあらず、殆ど同一の或る利害關係、生活の習慣、教育に依て結合さるゝものである。中流階級とか、農民社會とかは之である。

本書は專ら不等質的群衆の研究を目的とし、等質的群衆(黨派、閥、階級)の研究は別著に讓ることゝしたれば、玆には等質的群衆の特質を細說せず、今四五の代表的群衆の性質を考査して、不等質的群衆の研究を終りたいと思ふ。

第二章　所謂犯罪的群衆

群衆は或る期間激昂してる時は、純然たる自働的にして無意識的狀態に陷り、

暗示に依て指導せらるゝ故、如何なる場合でも、之を犯罪的なりと稱するは困難である。余が今此の誤れる犯罪的群衆なる言辭を用ふるのは、近時の心理學研究に於て普通に之を用ゐて居るから、暫く其の習慣に從ふのみである。群衆の或る行爲は、若し之のみを離して考察すれば、確かに犯罪的ではあるが、此時は一疋の虎が印度人を捕へ、之を虎兒の玩弄に供したる後、自ら之を貪食するを犯罪と呼ぶ意味で犯罪と言ふのである。

群衆の犯罪の普通の動機は、有力なる暗示である、而して此の犯罪に加はりたる個人は、後に至て、自ら義務を盡したものと確信して居る、是は普通の犯罪者には全くないことである。

群衆の犯した罪惡を調べて見ると、能く此事を說明して居る。

バスチーユ獄の司獄ヅ、ロネー氏が殺害された時の如きは、實に代表的實例である。司獄は群衆が城塞を乘取りたる後、激昂して居た群衆の爲めに取捲かれ、四方八方から打擲された。絞殺して仕舞へ、頭を刎ねよ、馬の尾に括り付

けよと色々と提言するものがある。司獄は左はさせじと悶き爭ふて居る中に、誤て群衆の一人を足蹴にかけた。すると其中の誰れか一人が、蹴られた者が司獄の咽喉を切るべしと提議した、此の提議は群衆より直ちに拍手喝采を以て迎えられた。

此の蹴られた人間は職業に離れた料理番で、此日バスチーユに何事があるだらうと見物に來たものであるが、司獄の首を刎ねるのが輿論だと言ふので、自分の行爲は愛國的で、此の暴戾なる怪物を亡ぼした功に依り、賞牌の一つ位は當然貰へるものと信ずるのである。そこで彼は人から貸された劍を取て、何ものも纏はない司獄の頸を目懸けて打下ろしたが、刄の鈍かりし爲め思ふ樣に切れないので、今度はポケットから黑柄の小刀を引出し、料理人で肉を切るに慣れて居たので見事に頭を刎ねて仕舞つた。

上に示した過程の作用は、此例に於て明かに見ることが出來る。即ち下手人は暗示に順從したのである。此の暗示は集合體から出たので其力が一層强い。

又下手人は自分が手柄になる行動を爲したと確信して居る。此の確信は、彼が同胞市民より一齊に稱讃を博したのを見れば、誠に自然のことである。此種の行爲は、法律を以て見れば犯罪であるが、心理學上から見れば犯罪と見做すべきものでない。

犯罪的群衆の一般的特性は、各種の群衆に見る所のものと正に同一である。暗示を受け易きこと、輕信性、動搖性、善惡に拘らず感情の誇張、或る形式の道德の表示等之である。

是等の特性は、佛國史に最も不快なる記憶を殘した群衆、即ち一七九二年九月の虐殺を行ひたる群衆に於て見ることが出來る。此の群衆は、聖バーソロミユー祭の虐殺を行つた群衆と能く似て居る。史家テーヌは當時の記錄に依て當時の事情を詳述して居るから、今之を玆に借りることゝする。

當時囚人を殺戮して獄舍を空虛にすべしとは、誰が命令したのか、又誰が暗示を與へたのか明確に知ることが出來ない。多分はダントンであらうが、ダン

トンでも他の人でもそは關係がない、吾人に取て興味のある事實は、此の虐殺の任務を負はされた群衆が受けた力强き暗示である。

當時虐殺に參加した群衆の數は約三百人を算し、完全なる代表的の不等質的群衆で、少數の專門的惡漢を除く外、多くは、各種商店の店員、各種の職業に從事するもの即ち製靴工、錠前屋、理髮師、石工、手代、使丁等であつた。彼等は力强き暗示を受けて、丁度前に述べた料理人の樣に、愛國的義務を遂行して居るのであると確信して居る。彼等は裁判官と死刑執行人との二重の役目を盡して居るが、自分等が犯罪を犯して居るとは夢にも思つて居ないのである。

群衆は自分等の職分の重大なるを自覺し、先づ一種の裁判廷を形成す。此の行爲に於て群衆の公明正大と、其の正義の觀念の幼稚なることが直ちに看取される。此の法廷に立つべき被告の數が非常に多いので、先づ貴族、僧侶、役人、王族――一言にして云へば單に其の地位だけにて、善良なる愛國者の眼には有罪の證據と見える凡ての個人――は其の場合を考慮して、特別なる判決を與ふ

る必要なきを以て、一齊に殺戮すべしと決した。其他のものは其の容貌、外觀、名聲を參酌して判斷すべしと決した。群衆の幼稚なる良心は此の如くして滿足されるのである。斯くなれば群衆は法律的に虐殺を實行することが出來、之と同時に猛惡なる本能を遠慮なく發揮する樣になる。此の猛惡なる本能は集合體に於て高度に發達するものなる故、余は曩に其の起源を論じたことがある。併し普通群衆の場合に於ける如く、是等の本能は、他の之と相反する諸感情、例令ば親切心の如き感情を、猛惡性と同程度に極端に發露するを妨げない。

彼等は巴里の勞働者の如き蔓延的同情と、鋭敏なる感覺を有して居る。アッバイエに於て囚人が二十六時間も水を與へられず放置されてあつたと聞き、看守を殺さうとした。囚人自ら之を止めなかつたら必ず實行したであらう。一人の囚人が即決裁判にて放免された時、番兵も虐殺者も一所になり、歡呼して彼を包擁し、次で大虐殺は再び開始された。此の虐殺の進行中歡喜の聲は決して止まなかつた。累々たる屍體を取捲いて舞ふものあり、歌ふものあり、貴族の

虐殺せらるゝのを見るを樂しみとしたる婦人客には長椅子を供へて見物せしめたと。著者は尙ほ進で特殊の正義の行はれたことを說いて居る。

アッバイエに於て一人の虐殺者が、婦人連は少し隔りて善く見えず、又其處に居合せたる人の中少數の人々のみ、貴族を打擲するの樂みを得るに過ぎずとて、苦情を唱へたる爲め、公平に見物せしむることゝし、且つ被刑者は二列に並べる虐殺者の間を靜かに通過せしめ、苦痛を長引かしむる爲め、只刀背を以て彼等を打たしむることに決した。ヅ、ラ、フォルスの獄舍に於ては被刑者等は、全く衣服を剝ぎ取られて、裸體となり、三十分間殘酷たらしく切りさいなまれ、各人に充分見せた上、最後の一擊に腸を露出して息絕えた。

虐殺者も亦狐疑躊躇する所あり、曩に既に群衆の間に存在することを指摘した彼の道德觀念を示し、犧牲者等の金錢寶石には目もくれず、之を幹部の卓上に積み上げた。

群衆の幼稚なる推理、其の心意の特徵は、常に之を群衆の諸行爲の上に看る

ことが出來る。此の如くして一千二百人か、一千五百人を虐殺したる後、群衆の一人が、老年の乞食や、浮浪人や、少年囚等を收容した獄舍は、實際穀潰し共を入れて置くのであるから、彼等を屠殺して其煩を免るべしと發言したので、其の暗示は直ちに採用された。又是等囚人中には實際人民の敵もあるべし、例令ばデラリュドと稱する一囚人の寡婦などは是である。彼女は獄舍に投ぜられたことを憤り居るに違がない。若し自由を得たら巴里に放火するだらう。彼女は斯く斷言したに違がない、否斷言した、是も善い厄介拂であると。」此の如き論證は群衆の認容する所となり、囚人等は悉く殺されて仕舞つた。其中には十二歲より十七歲迄の少年が五十人許り居たが、群衆は是等も後年になつたら國民の敵となるやも測られずとし、之を片付けて仕舞ふのが當然だとしたのである。

此の如くして一週間虐殺を行ひたる後、彼等は始めて一息休むことを得た。彼等は國家の爲めに働きたることを深く確信して、彼等の勞に對して報酬を求

め、最も熱心なるものは賞牌をさへ要求した。

一八七一年の巴里の歴史には、上掲事實に似た事實が幾等もある。群衆の勢力增進し、權勢ある者が之に屈從するに從て、吾人は此類の事例を幾らも見ることであらう。

第三章　刑事陪審官

玆で各種の陪審官を論ずることが出來ないから　其中の最も重要なるもの、陪審官裁判の陪審官だけに就て述べて見よう。是等の陪審官は無名ならざる不等質的群衆の好適例である。被等は被暗示性を有し、殆ど推理の力を有せず、群衆指導者の影響を受け易く、主として無意識的感情に依て指導せられる。本研究の進行中に、吾人は群衆心理に慣れざる人士が、動もすれば陷り易き誤謬の二三の面白き實例を觀察する機會あることゝ思ふ。

第一に陪審官は、其の判決の關する限りに於ては、群衆を組成する各種要素

の智識の高下は重要なるものでないことを示す實例である。或る討議の爲めに召集された會議が、全然專門的でない或る問題を討議する際には、智識は何等の役に立つものでないことは曩に論じた。例令ば科學者や美術家は、被等が單に會合したりと言ふ丈けの事實で、石工や雜貨商の集會で下し得る判斷よりも、一般的問題に關しては別段優れた判斷を下すことが出來ない。各時代に於て、殊に一八四八年以前の時代に於ては、佛蘭西の爲政者は、陪審官を編成する人物には充分なる選擇を加へ、教育ある階級のみより之を採り、大學教授、官吏、文士等より選拔した。今日に於ては陪審官は大部分、小商人、小資本家、雇傭人抔より採用せらる。而かも專門記者等の喫驚する所は、陪審官の組織如何に拘らず、其の判決は同一である一事である。陪審制度に反對する執政官でも、此の說の正確なるを認めざるを得なかつた。前陪審裁判所長ベラール、デ、グラジュー氏は此の問題に就き其の回想記に次の如く言つて居る曰く、

「陪審官の選拔は、今日に於ては、事實上市參事會員の手に握られて居る、彼

等は彼等の位地に固有なる政治上及び選擧上の成見に從て之を任免したり又は解任したりして居る……選拔された陪審官の多數は商業に從事せる人々で、それも從前よりも重要ならざる人々、及び行政府の或部門に屬する使用人である……意見及び職業は、一度判官の役目を取ると、別段重きを爲すものにあらざると、陪審官の多くは新進者の熱心を以て事に當ると、善意を懷ける人々は卑賤の位地に於ても、然らざる時と同樣の心情を有するとに因り、陪審官の精神は少しも變る所がない。即ち陪審官の判決は古も今も依然として同一である。」

此の結論は當然の結論であつて、心肝に銘じて忘る可らざるものであるが、其の說明は極めて薄弱である。其の薄弱なるは辯護士が執政官と同じく群衆心理に通ぜず、從て陪審官の心理に通ぜぬ故である。余は此說の誤らざる證據を、今引用した著者の語つて居る一事實に於て見ることが出來た。氏曰く陪審裁判所に於て、最も有名なる辯護士の一人なるラショー氏は、陪審官の各員が皆有識の士なる時は、常に其の一員に對して抗辨する權利を行使した、併し經驗は、

然り經驗のみは此の如き抗辨の全く無用なるを示した。此事は、現今に於て、巴里法曹界に於ける檢事も辯護士も、陪審官に抗辨する權利を全く放棄したるに關せず、グラジュー氏の言へる如く、判決は以前より善くもならず惡くもならざるを見ても明かである。

凡ての群衆の如く、陪審官は感情には動かされ易きも、議論に動かさるゝことは殆どない。一辯護士曰く、彼等は一人の母が其兒に乳房を含ましむるも見るに忍びず、又孤兒をも見るに忍びずと。グラジュー氏曰く一人の女が陪審官の好意を得んとするには、容貌さへ美なれば充分であると。

陪審官は彼等自ら犧牲となるやも測られざる犯罪――斯かる犯罪は社會全般に對して危險である――に對しては、何等憐憫の情を示さゞるも、情慾の動機で法律を破つたものに對しては非常に寬宏の度量を示して居る。彼等は若き未婚の母の子殺し、又は初め自分を誘惑して後に己を見捨てた男に硫酸を浴びせ掛けた少女に對して、苛酷なる判決を與へることは極めて希である。是れ彼等

が社會が斯かる犯罪より危險を感ずること希有であること、又法律が見棄てられた少女を保護せざる國に於ては、少女の復讐は將來の誘惑者に對して警戒を與ふる故、有害と言ふよりは寧ろ有益であることを本能的に感ずるからである。

陪審官は、又勢威に依て深き印象を受ける。前記グラジュー氏が、陪審官は其の組成極めて民主的なるも、其の好惡の感情は極めて貴族的なりと言つて居るのは尤なことである。曰く、家名、門地、巨富、高名、有名なる辯護士の援助、其他何事にまれ被告を顯著ならしめ、其の光彩を增すものは、彼を非常なる好位地に立たしむるものであると。

良辯護士の主として心掛くべきは、群衆に對すると同じく、陪審官の感情を動かすに努め、議論は用ゐぬことである。或は極めて幼稚なる論法を用ふることである。陪審官裁判で成功を收めるので有名なる英國の一辯護士は次の如く言つて居る。曰く

「辯論中注意して陪審官を觀察し、最も好都合の機會來る時は、辯護士は陪審

官の顏色を見て、自己の辯論が彼等に與へた影響を察し、之に應じて結論を作る。彼の第一着手は先づ陪審官中の何人が自己の所說に傾いたかを確かむるにあるのである、斯くなると人々を我が味方とするのは容易いことで、之が出來れば自己に反對の陪審官に注意を向け、彼等が何故被告に對し敵意を有せるかを發見するに努むるのである。是は最も困難な仕事である、蓋し一人の人を非難する理由は、正義の感情を別として、無限にあるからである。」と

以上の數行は雄辯術の全祕訣を示して居るものである。豫め用意した演說が効果の少ないのは之で明かである。蓋し演說の効果を收めようとするには、辯士は自己の一言一句が聽衆に與へた印象に應じて、刻々其の言辭を變更する必要があるからである。

辯士は陪審官の全員を自己の意見に服せしむる必要がない、彼等の輿論を決定すべき指導者等を動かせばよいのである。凡ての群衆の場合に於ける如く、陪審官に於ても指導者の地を占むる小數の個人がある。前記辯護士曰く、「余は

經驗に依て、一二の有力なる人士は、他の陪審官を動かすに充分なることを知りたりと。」故に巧妙なる暗示を與へて説服するの必要あるは、是等二三の人である。先づ第一に、殊に彼等を喜ばす必要がある。群衆の一部を組成せる人を喜ばすに成功すれば、之を説服するの端緒に達したものである、蓋し彼は直ちに自己に提示さるゝ議論を是なりとして之を認容するの傾を生ずるからである。

前掲のラショー氏に關し面白き逸話がある。曰く、

「ラショー氏は陪審裁判所に於て辯論中は、勢力あるが併し頑强なる二三の陪審官より決して眼を放たざりしことは、人の皆知る所である。氏は必ず是等の頑固なる陪審官を説服するに成功した。併し或時地方に於て氏は頗る頑强なる陪審官に遭遇した、彼は四十五分の間、巧妙なる辯論を揮つたが何の甲斐もなかつた。此の人は第七の陪審官にして、第二列の長椅子に座席を占めて居た。氏の辯論も殆ど絶望に終らんとした。所がラショー氏は熱心なる辯論の最中突然言葉を止めて裁判長に謂て曰く、何卒前面の窓覆を誰かに引下さして下さらぬか、第七の陪審官は日に射し込まれて眩目しそうなればと。其の陪審官は顔を赤らめ、微笑して謝意を表した、斯くて彼は其の辯護士に同意を表するに至つた。

陪審制度は、何等掣肘を受くる所なき執政官等の屢行ふ誤謬に對して、吾人の有する唯一の保障なるも、此頃多くの記者、其中には最も有名なる記者等も加はりて、陪審制度に對し、激烈なる反對運動を起した。是等記者の一部は、專ら教育ある階級より選拔したる陪審官を用ふべしと主張するも、此際に於ても其の判決は現在制度の陪審官の判決と異なる所なきは既に説いた通りである。又一部の記者は陪審官の誤謬に陷ることあるを指摘して、陪審官を廢し、判事を以て之に代らしむべしと主張する。併し是等の所謂改革者は、陪審官の誤謬と言ふのは、初め既に判事の陷りたる誤謬であること。又被告が陪審官の前に引出さるゝ迄には、既に數人の執政官、檢察官、檢事、起訴裁判所に依て有罪と決せられたことを忘れて居るのである。由是觀之陪審官を廢し、專ら判事の

判決を受くることとなれば、被告は無罪を宣告せらるゝ唯一の機會を失つて仕舞ふ譯となる。要するに陪審官の陷る誤謬は何時も必ず先づ執政官の陷る誤謬である。果して然らば特に奇怪なる判決の與へらるゝ時は、非難すべきは寧ろ執政官である。例令ば近頃エル博士に與へられたる判決の如きは其の適例である。即ち非常に愚昧なる檢察官は、半ば痴愚の一少女が、同博士が三十法の金で少女に對し不法の手術を行つたと證言したのを取り上げて、博士を告訴した、此時若し公衆が非常に激昂し、國家の首長が、直ちに博士を釋放しなかつたら、博士は寃罪を被むつて獄に投ぜられたであらう。同胞市民が博士の品性の尊敬すべきを認めたので、博士に對する非難の誤謬であることは明かである。執政官等も之を認めたが、彼等は自分等僚閥の體面を維持する點より、極力放免狀の調印を妨げようとした。是のみならず、凡て是に類似の事件に於ては陪審官は、自分の了解の出來ない專門的事項に遭遇する時は、結局、同事件は最も複雜なる難問を解決する訓練を與へられたる執政官の審査を經たるものであると

言ふ理由で、自然と檢事の言に耳を傾くるものである。然らば誤謬に陷るものは何人であるか、陪審官なるか、執政官なるか。吾人は飽迄陪審官制度を主張せねばならぬ。陪審官は個人を以て代置することの出來ない唯一の群衆である。法律は萬人に對し平等にして、個々特別の場合を斟酌すべきものでない。此の法律の峻嚴を緩和するものは獨り陪審官あるのみである。判事は憐憫の情に制せられず、眼中只法律の正文あるのみとすれば、殺人罪の强賊に對しても、情夫に捨てられ貧に迫りたる結果嬰兒殺しの罪を犯したる憐むべき少女に對しても、職掌柄同一の峻嚴なる罰を與へる。陪審官は之に反し誘惑された少女は、法律の制裁を受けざる誘惑者よりは、遙かに罪の輕きこと從て充分酌量減刑の價値あることを本能的に感知するものである。

余は僚閥の心理、及び其他諸種の群衆の心理を知るを以て、若し寃罪を被むりたる時は、如何なる場合に於ても、執政官の裁決を受くるよりは、寧ろ陪審官の判決を望むものである。陪審官の手に懸れば寃罪であることを認められる

機會もあるが、執政官の手に懸る時は、絶對に斯かる機會は望まれないのである。群衆の權力は恐るべきものであるが、或る僚閥の權力は更に恐しいものである。群衆は之を論破し得ることがあるが、僚閥には決して此事がない。

第四章　選擧者の群衆

選擧者の群衆――或る職權の保有者を選擧する權能を與へられたる集合體――は不等質的群衆である。併し其の行動は、或る明かに限定されたる事柄、即ち多くの候補者の中より適當の人を選擧すると言ふ事に局限されて居るから、前各章に於て論じた群衆特性中の四五のものを表示するに過ぎない。即ち群衆の特性中殊に推理力の缺乏、批評的精神の缺如、憤激性、輕信性及び單純性などを示す。加之彼等の斷定に於て群衆指導者の勢力、及び前に既に列擧した諸要素、即ち斷定、反覆、勢威及び傳染の務むる役目を見ることが出來る。

先づ選擧者の群衆が如何なる方法に依て說服さるゝか調べて見よう。最も成

功せる方法が判明すれば、之よりして彼等の心理を歸納することは容易な事である。

第一に重要なることは、候補者が勢威を有することである。個人的勢威に代り得るものは、富より來る勢威のみである。才幹も、天才と雖ども、重要なる成功の要素ではない。

候補者が勢威を持して選擧者に臨み、議論の餘地なからしむることが何よりも必要である。選擧者の多數は勞働者や農夫であるが、彼等が仲間の中より代表者を選出することが殆どないのは、斯かる人は彼等の間に何等の勢威を有しないからである。若し偶然にも自分等の仲間より代表者を選出することがあれば、そは間接の理由に因るのである。即ち知名の士の名聲を損はん爲めか、又は選擧者が平常自分等が屈從して居た有力なる傭主に對し、一時自分等の方が主人となりたる如き迷想を懷くが爲めである。

併し勢威あるばかりで候補者の成功を確保することが出來ない。選擧者と言

ふものは、貪慾と虚榮心との滿足で方向を定め、反覆常なきものなれば、彼等の心を收攬せんには盛に甘言を浴びせ掛け、最も幻想的なる約言を與ふるに於て少しも躊躇してはならぬ。

若し選擧者が勞働者である時は、其の傭主の侮辱、誹謗、罵詈は如何に激烈なるも其の及ばざるを恐るゝ位である。反對候補者に對しては、彼が非常なる惡漢にして、屢犯罪を犯せるは世人の熟知する所であると言ふことを斷言、反覆、傳染の手段に依て、選擧人の心肝に銘記せしめ、其の成功の機會を破壞し去らざる可らず。之が實證を擧ぐるなどのことは勿論無用である。若し反對候補者が群衆心理に通ぜざるものであれば、斷言に報ゆるに斷言を以てせずして、徒らに論辯を費して辯解するに努むるものである、此の如き候補者は決して成功の機會を捉へることは出來ないのである。

候補者の政綱方針は餘りに嚴正に之を文書にして發表すべきものでない、後に至て反對者に攻擊の材料を與へるものである。併し口頭で言ふことならどん

な誇大な言辭を用ゐても其の及ばざるを恐るゝ位である。最も重大なる改革でも、大膽に顧慮する所なく約束して宜しい。此の如き約束は其の當座は偉大なる効果を奏するもので、決して之が爲めに將來の行動を束縛されるものでない。選擧人なるものは、自分の選擧した候補者が、其の約束した政綱を、何處迄實行したか、之を一々調べて見る程の面倒を見るものでないことは、吾人の絶えず目擊して居る所である。

以上論述したる所に於て、吾人の前に說き及ぼしたる說服の要素は皆認むることが出來る。言辭套句の及ぼす作用に於て復た之を說くことあるべし、此の言辭套句の作用に就ては既に說いた通りである。此等の說服手段を知つて居る辯士論客は、自由自在に群衆を操縱することが出來る。不名譽なる資本とか、卑劣なる事業家とか、嘆稱すべき勞働者とか、富の社會化とか言ふ句は、既に餘程使ひ古されて居るけれども、何時も變らぬ効力を持て居る。併し出來る丈け漠然たる意味を有する新套句を考ひ出して、種々雜多の願望を滿足させるこ

との出來る候補者は必ず成功する。一八七三年の西班牙の血腥き革命は、複雜なる意味を有し、何人も隨意の解釋を與へ得る、魔力ある套句に依て惹起されたのである。當時の一記者が此句が使用された模樣を說いて居る所に據るに、當時聯邦共和制なる套句が盛に喧傳し、聯邦共和黨員にあらざれば人にあらざる如き有樣であつたが、扨て此の聯邦共和制なる句の解釋となると、萬人萬樣の解釋を下し、或者は北米合衆國の如き地方分權制を創設するものと爲し、或者は社會の解體を行ふものとなし、バーセロナ、アンダルシア等の社會黨員は、地方團體の絕對的主權を主張し、斯くして遂に聯邦主義は化して地方分立主義となり、結局虐殺、放火等の暴虐殘忍なる事盛に行はれ、全國を通じて流血の不幸を見るに至つたと言つて居る。

推理に依て選擧者の心意に勢力を及ぼすことの出來ないことは明かである、之に對して疑を挾むのは、選擧會の報告を讀まない結果である。此の如き會合に於ては、斷言、罵詈、時としては毆合を交換して居るが、決して議論を交換

して居ることがない。一時喧騷が止み沈默に歸ることがあるとすれば、それは野次の隊長などゝ謂はれて居るものが、是れから一の難問を出して、候補者を苦めてやりますなどゝ言つて、聽衆を喜ばす時の事である。併し反對黨の滿足も喜びも暫しの間で、忽ち場內喧擾を極め、質問者の言も更に其の反對者の喧囂裡に沒して仕舞ふものである。

併し此の如き騷は、決して選擧者なる一階級に特有なるものにして、其の社會的位地に附隨せるものと想像してはならぬ。如何なる集合でも、無名の集會に於ては、會衆が敎育ある人士のみなる時に於ても、此樣の事が起るものである。人が集まつて群衆を成す時は、心的均一の傾向があり、其の智識が同一の程度に下るものであることは、曩に說いた通りである。

或は問はん、選擧者は此の如き狀態の下に於て、如何にして其の意見を形成することを得るかと。此の如き疑問を出すのは、集合體の享受し得る自由の程度に就きて、不可思議なる迷想を懷くのである。群衆は彼等に强制された意見

を有するもので、決して推理した上の意見を以て誇りとするものではない。茲に研究して居る如き場合に於ては、選擧者の意見及び投票は選擧委員の手に握られて居る、而して是等の委員は一般に酒店の主人等に支配される、酒店の主人等は掛賣をするので、勞働者に對して偉大なる勢力を持て居るのである。現代民主々義の勇將なるシエレー氏は、「諸君は選擧委員會の何ものたるを知れるか、是れ吾人の制度の樞石に外ならずして、政治的機關の傑作である、佛蘭西は今日は選擧委員會に依て支配されて居る」と言つて居る。

若し候補者にして充分なる財源ある時は、選擧委員を動かすことは決して難事でない。ブーランジェー將軍の再選を保障するには、三百萬法あれば充分であるとは資金寄附者の告白して居る所である。

上述の如きものが選擧者の群衆の心理である。他の諸群衆の心理と全く同一であつて、之よりも惡くもなければ善くもないのである。

此の如くなれば余は前述したる所よりして、普通選擧に反對の結論を爲すこ

をしない。若し余にして普通選擧の運命を決せざる可らずとせば、余は群衆心理の研究より演繹し得る實際的理由により、之を保存したいと思ふものである。此の理由を以て今より少しく述べて見ようと思ふ。

普通選擧の弱點は極めて明白である。文明と言ふものは、智識の優逸せる小數者の作る所であることは言ふ迄もない。此の少數者は譬へて言へば丁度三角形の頂點に位し、基底に近づくに從て智力劣等の民衆を包擁して居るものである。文明の偉大は、只多數を誇りとする、智識劣等なる要素の投ぜる投票に因るものでない。加之群衆に依て與へらるゝ投票は、往々にして極めて危險の性質を有することあるは疑なきことである。群衆の投票の爲め、佛蘭西は屢外敵の侵入を受けた。又群衆が之が爲めに道を具へつゝある社會主義の勝利に鑑みるに、吾人は民衆主權の空想の爲めに、更に高價なる犧牲を拂ふの時があるであらう。

併し是等の普通選擧に反對する理由は、理論上は立派であるが、實際に於て

は勢力がない。思想觀念が變形して獨斷說となる時は、抵抗し難き勢力を有するものなることを記憶せば、此事は當然のことと思はれる。群衆主權の獨斷說は、哲學上より見る時は、中世紀に於ける宗教的獨斷說の如く、全く辯護の餘地なきも、今日に於ては、中世紀に於ける宗教的獨斷說と同じく、絕對的權力を有して居る。今や過去に於ける宗教的思想の如く容易に之を攻擊することが出來なくなつて居る。今假りに近世的自由思想家が、奇績に依りて、中世紀時代に引戻されたりと想像するに、此の思想家は、當時世に行はれたる宗教的思想の主權を確知したる後に於て、之が反駁を試みたであらうか。若し此の如き擧に出でたら、裁判官は、惡魔と契約を結べりとか、又は巫術者の安息日に出席したりとかの理由を以て、彼を火刑に處するであらう、此時尙ほ彼は惡魔や、巫術者の安息日の存在を疑問とすることが出來るか。群衆の信條に對して議論するは、旋風に對して議論する如きものである。普通選擧の獨斷說は、今日は、往時基督敎の獨斷說が有したる如き權力を有して居る。辯士や記者は之に對し

て、路易第十四世さへ有せざりし尊敬と諂諛とを表して居る。故に吾人は之に對しては宗教的獨斷說に對したると同樣の態度を以てせねばならぬ、之に何等かの作用を及ぼし得るものは、只時（タイム）あるのみである。

加之獨斷說は如何にも道理らしき外觀ある故、之を打破しようとするのは無用の業である。トクヴイユの言つて居ることは尤である。曰く、「平等の行はる時代に於ては、人々は互に相似たる所ある故に、相互の間に信用を置かない。併し此の互に相似たることが、人々をして公衆の判斷に殆ど無限の信用を置かしめる、是は萬人同樣の敎化を受けて居るので、眞理と多數とは併行せずと言ふことはあるまじく見ゆるからである。」

制限選擧制——智識ある人士にのみ選擧權を與ふる——を以て、群衆の投票に改良を効果し得べきかと言ふに、余は然らずと思ふ、其の理由は既に說きたる如く、集合體は如何なる分子より成るを問はず、其の智識の標準は劣等なるものであるからである。人々は群衆の中に入ると何時でも同じ智識の平準に歸

する傾向のあるもので、一船的問題に於ては、四十名の學士會員の爲したる投票も、四十名の撒水夫の爲したる投票より毫も優る所がない。普通選擧制に非難――例令ば普通選擧制は帝政を再建したりと言ふ如き――を加ふるものあるも、縱令當時投票者を博學にして教育あるものゝみの中より集めても、余は異なる結果を得たらうとは思はない。或人が希臘語を知つて居るとか、數學を知つて居るとか、建築家であるとか、獸醫であるとか、醫師であるとか、辯護士であるとかと言つて、其人は社會上の諸問題に對して特別なる智識を賦與されたとは言ひ得ない。吾國の經濟學者は皆高等教育を受けた人々で、多くは大學教授か、學士會員であるが、一般的問題――保護主義とか、通貨複本位主義とか等の――に就ては、只の一個の問題でも彼等の一致したものはないのである。是れ彼等の學問が、吾人の一般的無識の形式に過ぎないからである。社會的諸問題に就ては、未知の問題が無數に湧き出るので、人々は殆ど同樣に無智である。

此の如くなれば縱令選擧者が、種々の科學を詰め込まれた人々より出ろも、其の投票は今日の投票に優る所なく、彼等は主として感情と黨派的精神に依て指導され、今日吾人が戰ひつゝある困難は依然現はれ來り、吾人は僚閥の壓制に苦めらるゝことは疑のないことである。

群衆の選擧權が制限せらるゝ場合も、普遍なる場合も、共和國に行はるゝも、君主國に行はるゝも、佛蘭西、白耳義、希臘、葡萄牙若くは西班牙に行はるゝも、其理は常に同一である。之を要するに選擧は人種の無意識的向上心及び必要の表現である。各國に於て選擧せられた人々の普通意見は、人種の精神を示すもので、時代々々によりて著しく變化するものでない。

玆に於て吾人は再び曩に論じた人種の根本觀念と、其の結果として生ずる觀念即ち制度と政府は國民の生活に於ては些細なる役目を務むるに過ぎざることを見た。國民は主として人種の精神、即ち祖先傳來の諸性質の心髓に依て指導せらる。人種と、吾人が日常の必要に服從するとは、吾人の運命を支配する不

可思議なる主要原因である。

第五章　議　會

議會は無名ならぬ不等質的群衆の實例である。議員選擧の方法は時代に依り國に依り異なるも、皆相似たる特質を有して居る。此の場合に人種の影響は、群衆に共通なる特質を薄弱にし、又は强力ならしむることを得るも其の發現を妨ぐることはない。非常に相違せる國々、例令ば希臘、伊太利、葡萄牙、西班牙、佛蘭西、米國等の議會に於ても、其の討論や投票は大に相似たる所あり、從て孰れの政府も同一の困難に遭遇するのである。

加之議會制度は、凡ての近世文明國民の理想を示すものにして、心理學上より見れば誤謬なるも、一般に認められたる思想、即ち或る問題に對し賢明獨立なる判斷を與ふるは、少數よりも多數人の集合の方遙かに有力なりとする思想の表現である。

群衆の一般的特性は議會に於て之を見ることが出來る、智能の單純、憤激性、被暗示性、感情の誇張、僅少の指導者の勢力を揮ふことなどそれである。併し又議會群衆は特別組織より出來て居るので、他と異なる特徴を示すものである。

其の最も重要なる特性の一は彼等の意見の單純なることである。總ての黨派に於て、特に羅典民族の關せる限りに於ては、此種の群衆に於て、最も複雜なる社會問題を、最も單簡なる抽象的主義及び、各場合に適用し得べき一般的法則に依て解決せんとする傾きがある。其の主義は黨派に依て相違あるは固よりであるが、各議員が群衆の一部なりとの單純なる事實に依りて、常に其の主議の價値を誇張し、之を極端迄推し進めんとする傾向がある。夫れ故に議會なるものは殊に極端なる意見の代表者である。

議會群衆は極めて暗示を受け易い、而して凡ての群衆の場合に於ける如く、暗示は勢威を有する指導者より起るが、議會群衆の暗示性は明確なる制限を有する。

地方的利害問題に就ては、各議員は確乎不動の意見を有し、如何なる議論も之を動かすことが出來ない。縱令デモスセニースの雄辯があつても、有力なる選擧者の制害が含有されて居る諸問題、例令ば保護とか、酒精釀造とか言ふ問題に對しては、一國會議員の投票も左右する力がない。選擧者より出でゝ、投票の時迄支持された是等の暗示は、議員に强き印象を與へ、他の源泉より來る暗示に打勝ち、意見の絕對的固定を支持する力がある。

一般的諸問題——內閣顚覆、租稅賦課と言ふ如き——に就ては、意見の固定と言ふものなく、普通群衆と全く同一にはあらぬも、指導者の暗示は勢力を及ぼすことが出來る。各黨派には時として勢力相如く數名の指導者あることあり。其の結果代議士は相反對せる二個の暗示の間に挾まれ、進退に躊躇することがある。彼が一議案に贊成を表して十五分も經たない中に反對の投票を爲し、一法律案を可決したる後に、之を無効ならしむる一個條を之に附加することあるは之が爲めである。例令ば傭主から勞働者任免の權利を奪取しながら、次で修

正を加へて殆ど之を無効ならしむるなどは之れである。

召集された各議會が確乎不拔の意見と、極めて變動し易い意見を有するのも同じ理由に因る。全體に於ては一般的問題は其數極めて多きを以て、議會內に於て狐疑不決斷が行はれる。此の不決斷は議員が常に選擧者を恐れて居るから起るのである。蓋し議員が選擧者から受けた暗示は、常に潛伏はして居るが、指導者の勢力に對抗する傾向があるものである。

併し議員が鞏固なる定見を有せざる問題に關しては、確かに數多の討論を支配する主人公は指導者である。

是等指導者は、團體首長の名目の下に、各國議會にあるを見れば、其の必要なるは明かである。是等指導者は議會に於ける實際の支配者である。群衆を組成する人々は、支配者を戴かずしては行動すること能はざるものなれば、議會の投票は、原則として、極めて少數者の意見を代表するのみである。

指導者の勢力は、彼等の議論より生ずること少なくして、主として其の勢威よ

り生ずるものである。其の證據には、何かの事情で勢威を失墜すれば、其の勢力も次で消え失せて仕舞ふのである。

是等政治的指導者の勢威は個人的のものであつて、名聲や評判には關係がない。若し群衆にして、黨の爲めに努力したるにせよ、國家の爲めに盡したるにせよ、其竭したる勤勞に依て、指導者を敬畏するに至れば、其の群衆は既に群衆の性質を失ふのである。指導者に從ふ群衆は其の勢威に支配されるのであつて、利害とか感謝とかの感情に依て支配されるものでない。

此の如くなれば、充分なる勢威を賦與されたる指導者は殆ど絶對的の勢力を揮ふものである。有名なる議員クレマンソー氏が多年の間如何に絶大なる勢力を揮つたかは皆人の知て居る所である。彼一度合圖を與ふれば幾多の內閣は續々崩壞したのである。或る記者は彼が勢の絶大なりしを說き、X氏の議論はナポレオン一世の慘害以上に我が領土に高價なる犧牲を拂はしめたと言つて居る。併し彼の勢力は彼が輿論に從つて行動したから得たものである。而して指導者

は輿論に先んじて行動すると言ふことは希有で、大概輿論の後を追ひ、輿論の誤謬を助長するものである。

指導者は其の勢威を別として、又勸說の手段に通ぜねばならぬ。其の要素は既に數度說いた通りであるが、此等の手段を巧みに利用するには、指導者は群衆の心理に通曉し、群衆に話し掛くる方法を知らねばならぬ。殊に言辭、語句、及び假相の魔力あるを知り、證據を擧ぐるの煩累なき力ある斷言と、深き印象を與ふる假相とより成り、極めて概括的の議論を伴ふ一種の雄辯を有する必要がある。是は最も眞面目なりと稱せらるゝ英國の議會を始め、何處の議會に於ても見る一種の雄辯である。英國の哲學者メーンは、下院の討論を讀で見るに、全部の討議が薄弱なる概括論と、激烈なる人身攻擊との交換に過ぎないことがあるのは、吾人の屢見る所である、而して此の如き概括論が民衆の想像に多大の勢力を及ぼすのであると言つて居る。

有りそうにもなき誇張の言を爲すも、指導者に取つては極めて利益あること

である。例令ば或る辯士は、銀行家と僧侶は爆彈を投じた者に補助金を與へたとか、或る金融大會社の重役等は、無政府黨員同樣の嚴罰に値すなどゝ放言して、何等の抗議を受けないで居る。此種の斷言は群衆に對しては常に多大の効果があるものであるから、如何に激烈でも過ぐると言ふことがない。此種の雄辯程聽衆を威嚇するものがない、聽衆は若し之に對して抗議したら、反逆者とか、共謀者とかして壓服されんことを恐怖するのである。

既に說いた如く、此の特殊の雄辯は凡ての議會に於て大威力を揮つたものであるが、危急存亡の時は更に一段の强大なる力を加ふるものである。佛蘭西大革命當時の大雄辯家等の演說は、此點より見て極めて面白い讀物である。彼等は演說中、一刻一刻立止まつて、罪惡を罵り、善德を稱揚し、軈て大聲疾呼暴君を呪詛し、生きて自由市民たるか、然らざれば死と叫べば、聽衆は猛然起立して急霰の如き拍手喝采を浴びせ、次で平穩に再び着席したものである。

時として指導者は、智識あり、高尙なる敎育あるものたることあり、併し此

等の資格は指導者に取て、利益よりは寧ろ害になるものである。智識あるものは、事物の複雜なる關係を示し、說明を與へ、理解を早くし、人を寬大ならしむるを以て、主義宣傳の使徒に必要なる强烈なる確信を大に鈍くするものである。各時代の群衆の大指導者、殊に革命時代の指導者等は、憐むべき程狹隘なる智識を持つて居たものであるが、最大なる勢力を揮つたものは、智識の最も狹隘なるものであつたのである。佛國革命時代の大立物たるロベスピエールの演說は、之を讀で見ると其の支離滅裂人を驚かすものあるに拘らず、當時之を聽きたる者をして、血湧き肉躍るの感あらしめたのは此の理に因るのである。

狹隘なる心と結付きたる確信が勢威ある人に與ふる權力は之を思ふだに恐ろしいものがある。是れ蓋し群衆は本能的に、精力絕倫にして確信鞏固なるものの間に其の指導者を求むるに因るのである。

議會に於ける演說の成功は、殆ど全く辯士の勢威に依るものにして、決して其の議論に依るものでない。其の證據には、何等かの原因で勢威を失つたもの

は、同時に其の勢力、詳言すれば、投票を支配する權力を失ふのである。

名の知れざる辯士が價値ある議論を唱へても、議論以外に何ものもなき時は、よくて人をして傾聽せしむることが出來るに過ぎない。

議會に於ても激昂を極め來る時は、通常の不等質的群衆と異ならざるに至り、其の感情は常に極端に趨るもので、最も壯烈なる義勇的行動に出づることもあれば、極端なる惡虐なる事を爲すこともある、斯くなれば各個人は自己を沒却し、自己の個人的利益に正反對の法案に投票するに至るものである。

佛國革命の歴史は、議會が自意識を失ひ、自己の利益に相反せる暗示に從ふ程度を示す實例である。貴族等が自己の特權を廢棄したるも、國民議會の議員等が自己の危險を顧慮せず、同僚を斷頭臺に送りたるも、皆或る暗示の魔力に支配されたからである。ビロード、ヴレンネーが其の懷舊錄の一節に、吾人をして非難を蒙むるに至らしめたる吾人の決斷は、吾人が之を爲す前に二日間も、否只の一日間も希望したるものでない、吾人をして此擧に出でしめたものは一

時の危機であると言つて居るのは、此上なき的確の言である。

併し幸なことには此等の特質は、絶えず議會に現はるゝものではない。議會は或る瞬間に於てのみ群衆を組成するもので、其の議員は多くの場合彼等の個人性を保持するものである。議會が立派な專門的法律を作ることの出來るのは之が爲めである。是等の法律は靜かに書齋に於て研究した專門家の作り上げたもので、決して會全體で作つたものでない。斯かる法律が最善のものであることは當然である。只議員全體が種々の修正を加へて、其の性質を變じた時に於て不良の法律となるのである。群衆の事業は、常に孤立せる個人の事業より劣るものである。議會を保護して不良なる又は實行す可らざる法律を通過せしめざるは專門家の力である。此際は專門家は群衆の一時的指導者であつて、議會が彼に勢力を及ぼすにあらずして、却て彼が議會に勢力を及ぼすのである。

議會は其の運用に種々の困難あるに拘らず、人類が今日迄に發見した政治の形式中最善のもので、殊に個人的壓制の桎梏を免かるゝ最良手段である。議會

は兎に角哲學者、思想家、記者、美術家及び學者――換言すれば文明の精華を形成せる人々に取ては確かに理想的政體である。

加之議會政治には二個の重大なる危險あるのみである。第一は財政上の浪費の避く可らざる事で、第二は個人の自由を累進的に制限する點である。

第一の危險は、選擧者の群衆の緊急の必要及び先見の明の缺乏より來る必然の結果である。若し一議員が民主思想に滿足を與ふる議案を提出するか、凡ての勞働者に養老年金を與へ、國家の各使用人の賃銀を增給するの法案を提出すれば、選擧者を恐怖し選擧者の暗示に支配され居る他の議員等は、此等の議案が豫算の上に新たなる負擔を加へ、新稅の創設を餘儀なくすることを熟知して居ても、選擧者の利益を無視して敢て之を否決することを爲さない。之が贊成の投票を躊躇するは彼等には不可能である。經費增加の結果の顯はるゝのは遠き將來にありて、議員等に直接に不愉快なる結果を及ぼさゞるも、選擧者に不利益なる議案に贊成の投票を投ずる結果は、次期改選の時に明かに顯はれるの

である。

經費擴大の第一の原因に加へて、之にも劣らざる重大なる第二の原因がある、それは地方的目的の爲めに支出に同意を表せざる可らざることである。是等の支出は選擧者の緊急なる必要に應ずるものであるし、又自分が何かの議案を提出した時他の議員の贊成を得なければ何事も出來ぬもの故、議員は地方的議案だと言つて之に反對することの出來ないものである。

第二の危險の自由の制限は、左程顯著なるものにあらぬも、併し確かに實在的のものである。是は常に制限的行動を取る無數の法律の結果である。議員等は投票に依て是等の法律を制定するを自分等の義務なりと爲せるも、近視にして其の結果を見ることが出來ないのである。

此の危險は必然避く可らざるものである。最も民主的代議制度を有し、代議士が最も選擧者より獨立して行動し得ると稱せらるゝ英國に於ても此事は免かるゝ事が出來なかつた。ハーバート、スペンサーは既に古くなりたる其著に於

て表面上の自由の增大は、必ず實際上の自由の減少を伴ふものなることを示し、近著個人對國家に於て、英國議會に關して次の如く言つて居る。

「此の時代から立法は余の指摘したる針路を進み、急激に增加する壓制的方案は、絕へず二個の方法を取て個人の自由を束縛して來た。諸規則は每年其數を增し、市民は從前全く自由なりし事柄に關して束縛を加へられ、爲すも爲さゞるも自由なりし行爲も强制されて爲す樣になつた。同時に公共的殊に地方的負担は益增加し、人民は其の欲する儘に費し得べき部分を減ぜられ、官憲の欲する儘に使用すべき分を增加せられ、愈其の自由を局限せらるゝに至つた。」

此の自由の累進的局限は、ハーバート、スペンサーの指摘せざりし特殊の形式を取て各國に現はれて居る。是等無數の一般に制限的性質を帶べる法案の可決は、必然に之が運用の任に當れる官吏の數と權力とを增し、是等の官吏は文明諸國の實際的主人公となる傾向がある。世上の權力が絕えず移動する間にありて、行政官の閥のみ是等の變化に動かされず、個人的責任なく、其の地位恒

久的なる故、官吏の權力は愈增大する。是より壓制的なる專制々度は他にないのである。

制限的法律規則を絕えず發布し、日常些細の行爲を煩瑣なる形式を以て掣肘すれば、市民自由行動の範圍を益狹少ならしむるは必然の結果である。諸國民は、法律規則の增加に依て、一層能く自由平等を確保し得べしとの謬想に誤られて、日々益々增加する負擔を堪へ忍んで居る。其の結果彼等は自ら屈從を望むに至り、自發的精神及び精力を喪失する、そうなれば空虛なる影法師、受動的にして抵抗力なき自働器械たるに過ぎないのである。

此點に達すれば個人は自己の缺如せる力を自己以外に求めなければならぬ。從て政府の職掌は市民の冷淡無力の增加するに準じて增すのである。政府は必然に個人の有せざる自發的、企業的、及び指導的精神を示さねばならぬ。各種の事業を計畫し、指導し、保護するは政府の仕事となる。國家は斯くして全能の神となる。而かも經驗の敎ふる所に據れば、此の如き神の權力は決して永續

的のものでも強大なるものでもないのである。

或る國民の場合に於て、凡ての自由が表面上彼等の手中にある如く思はれて、實は凡ての自由が累進的に制限せられて居るのは、特殊なる制度にも基因するが又其の國民老朽の結果でもある。是れ古來如何なる文明も免るゝこと能はざりし衰頽の前兆である。

過去の教訓及び各方面に於て吾人の注意を惹く兆候に依て判斷するに、近代文明の或ものは既に衰頽に先立て來る老朽の域に達して居る。歷史が屢同一進路を繰返すを見れば、諸國民が同一の生存狀態を經過せざる可らざる事は避く可らざる事らしい。

文明進化の是等の共通現象を單簡に記するは容易いことであるから、今余は聊か之を略說して本書を終りたいと思ふ。此の略說でも今日の群衆の勢力の原因を知るに於て一道の光明を與ふるものがあると信ずる。

吾人若し現代文明に先立つ各文明の興亡盛衰の原因を探求すれば、如何なる

ものを發見するか。

文明の曙光の初めて現はれ出でたる時は、祖先を異にする一群の人間が移住、侵掠、征服の機會に依て集合して居る。是等の人間は血統を異にし、言語信條を異にして居るから、彼等を結合する唯一の紐帶は、彼等の半ば承認したる、酋長の法律である。是等の亂雜なる集合の中に、群衆の心理學的特質は著しく顯はれて居る。彼等は群衆の一時的結合、其の義勇、薄弱點、衝動、暴戾等の諸性質を有して居る、併し孰れも固定的でない。彼は野蠻人である。

遂に時は其の不思議なる仕事を完成する。境遇の同一、各人種の絕えざる混淆、生活の必要は相共に影響を及ぼし、異人種の集合は渾然融合せる一人種、換言すれば共通の特質と感情を有する集合體となる。而して遺傳は益此の特質と感情を強くする。斯くて群衆は一の民族となり、始めて野蠻的狀態より脫出することが出來る。併し是は長き努力奮鬪に依て一の理想を獲得したる時始めて出來ることである。其の理想の何たるかは重要なことでない、それが羅馬の

拜禮たると、雅典の武力たると、回々教徒の凱旋たるとを問はず、苟くも其の人種の各個人に感情と思想の完全なる統一を與ふればそれで充分である。

此の段階に至れば、制度、信條、藝術を有する新たなる文明生れ出で、民族は其の理想を追求するに於て、其の民族の華麗、元氣、壯大を與ふるに必要なる諸性質を引續き獲得するに至る。此時に於ても民族は尙ほ一個の群衆に過ぎざること往々あるも、斯くなりたる後に於ては、群衆の動搖變化し易き特質の下に堅固なる一個の地盤が出來る。此の地盤は即ち人種の精神であつて、一民族の變化を狹隘なる範圍に限り、偶然の機會の作用を支配するものである。

時は其の建設的作用を行ひたる後は、今度は破壞的作業を始める、神も人も之を免るることが出來ない。一個の文明は或點迄勢力と複雜を得れば生長が熄む、一度生長が熄めば急激に衰亡が始まる、即ち老朽の時が始まるのである。

此の避く可らざる老朽時代の兆候は、民族の支柱たりし理想の衰微である。此の理想が衰へるに從て之に依て鼓舞作興されたる凡ての宗教的、政治的、社

會的組織は動搖し始める。

理想の漸次衰へると同時に、民族の結合、統一、勢力の源泉は枯渇する。此時に於ても各個人の個人性及び智識は增すも、之と同時に民族の集合的自我心は廢れ、之に代りて極端に發達したる個人の主我心が勢を得、品性の柔弱と實行力の減退が之に伴つて起つて來る。曩に一國民たり、一個の統一體たり、一全體たりしものも、遂には結合力を缺き、傳說及び制度に依り一時人爲的に結び付けられたる集合體と爲り終る。此時に至るや、人々は自己の利害欲求に依りて黨を結び派を分ち、最早自治の力なく、些細な事にも他の指導を要し、政府は絕大の勢力を揮ふに至る。

民族が其の舊理想を失ふに至るや、民族精神なるものは全然消滅する。此時に至ると民族は孤立せる個人の單純なる集合であつて原始の狀態即ち群衆の狀態に復歸する。即ち堅實性なく、未來なく、群衆の一時的性質を悉く具へる。其の文明は今や鞏固なる根抵を失ひ偶發の機會の儘に推移し、民衆が主權を握

り、野蠻主義の潮流が充溢するに至る。此時に際しても、文明は過去の遺蹟たる外部の玄關構を有するので、尙ほ壯觀を呈するも、實際に於ては、何物も之を支ふるものなく、頽廢に瀕せる建物なれば、風雨一度至れば、忽ち崩壞するのである。

一個の理想を追求し、野蠻狀態より文明狀態に推移り、此の理想が其力を失ふや次で衰微し滅亡するのは、民族生活の循環である。

群衆心理 終

大正三年六月十五日印刷
大正三年六月十八日發行

アカギ叢書
第二十編
群衆心理(下)

著者 葛西又次郎
發行者 赤城正藏 東京市麴町區三番町五〇
印刷者 中田福三郎 東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場 東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

(定價金拾錢)
(郵稅金貳錢)

發兌元 東京市麴町區三番町五〇 赤城正藏
電話番町二二八〇番
振替口座東京一〇四三二
賣捌所 全國各書林

アカギ叢書

毎月數篇
内外刊行
（定價金拾錢 郵稅各貳錢）

○第一編　歐洲文藝　イブセン原作　村上靜人編　人形の家（一名ノラ）

○第二編　哲學叢話　ジエームス原作　中島文學士著　プラグマチズム

○第三編　歐洲文藝　日野月文學士著　ダヌンチオの演劇に現はれたる女性

○第四編　社會學叢　ルボン原作　葛西文學士譯　群衆心理（上卷）

○第五編　歐洲文藝　ドストイエフスキイ作　原　痴人

○第六編　歐洲文藝　村上靜人著　ウエデキント　と其著作

アカギ叢書

毎月數篇
内外刊行
（定價金拾錢 郵稅各貳錢）

○第一編　歐洲文藝　イブセン原作　村上靜人編　人形の家（一名ノラ）

○第二編　哲學叢話　ジエームス原作　中島文學士著　プラグマチズム

○第三編　歐洲文藝　日野月文學士著　ダヌンチオの演劇に現はれたる女性

○第四編　社會學叢　ルボン原作　葛西文學士譯　群衆心理（上卷）

○第五編　歐洲文藝　ドストイエフスキイ作　原　痴人

○第六編　歐洲文藝　村上靜人著　ウエデキント　と其著作

119
864

○第十五編　歐洲文藝　モーパッサン原作　板垣文學士編　レディースマン（一名ベラ、ミー）

○第十六編　美術叢話　佐々木文學士著　奈良の美術

○第十七編　歐洲文藝　モーパッサン原作　村上靜人編　女の一生

○第十八編　歐洲文藝　メーテルリンク原作　村上靜人編　モンナ、ヴァンナ

○第十九編　日本史談　龍居文學士著　日本建築史要

○第二十編　社會學叢　ルボン原作　葛西又次郎譯　群衆心理（下卷）

特色

（一）科學文藝より粹を抜き英を取り紳士の標準智識たるを期す

（二）廉價、簡明、平易に解說して天下に讀み難きもの無からしむ

（三）名著の紹介は簡にして精髓を失はず

終